The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	新出資料『華英通語』道光本と中国初期英語学習書の系譜 : 附論 福沢諭吉編訳『増訂華英通語』
Author(s)	田野村, 忠温
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2018, 58, p. 165-222
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68248
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

新出資料『華英通語』道光本と中国初期英語学習書の系譜

――附論 福沢諭吉編訳『増訂華英通語』――

田野村　忠　温

1　はじめに

『華英通語』は、19 世紀アヘン戦争後の中国で出版された、語彙集と会話文例集を主な内容とする英語学習書である。そして、それには複数の版があることが知られている。

図 1 は 1855（咸豊 5）年刊の『華英通語』における「眼鏡」の項目である。『華英通語』の各項目はこのように中国語の表現、それに相当する英語表現、その発音の漢字による表記という 3 つの要素によって構成されている。当該の版の『華英通語』で使われている中国語は広東語である。

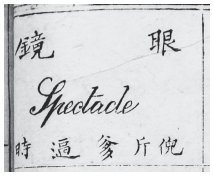

図 1　『華英通語』の「眼鏡」

『華英通語』は日本人の英語学習にも深い関わりがある。幕末に福沢諭吉が日本語による注釈を加えて出版した『増訂華英通語』は、日本における英語学習普及開始期に広く流通した英語学習書として知られる。

筆者は拙論（2017）のための調査をしていたとき大阪大学附属図書館の書庫で学界に知られていない版の『華英通語』を偶然見出した。[1] そしてそれは、19 世紀中国の関連する各種語学書との関係の分析の結果、中国の初期英語学習書の展開上肝要の位置を占めるものであることが判明した。

この小論では、その新出の『華英通語』をも用いて 19 世紀中国の初期英語学習書間における継承関係を明らかにし、併せて、『増訂華英通語』の原本の版および福沢が行った編集の内容を特定する。そして最後に、ここで扱う資料に関わるいくつかの付随的な問題に考察を加える。

---

1 当時同書は大阪大学附属図書館の分館の 1 つである外国学図書館の書庫にあったが、その後総合図書館の貴重コレクション室に移管された。

2　中国初期英語学習書の系譜の概略

個々の英語学習書の分析に先立ち、少々複雑な状況に見通しを与えるために、中国の初期英語学習書の継承関係の骨格的な部分をあらかじめ明らかにする。

2.1 『華英通語』の諸版

『華英通語』に複数の版があると言っても、それは作者が自らの著作を部分的に書き改めるという方法によって新しい版が作られたということではない。おそらく版ごとに作者は異なり、しかも、改版においてはしばしばほかの語学書も併用して古い版の内容が大幅に組み替えられている。しかし、そうであるにせよ、『華英通語』の複数の版は現に継承関係にある1つの系列を成していると見ることができる。それは、『華英通語』の諸版は、書名が一致するのみならず、内容や形式の面でも『華英通語』以外の英語学習書にはない特徴を共有していることによる。

『華英通語』の版については、すでに内田（1997, 2001, 2002）、矢放（やはなし）（2004, 2007, 2015）に記述がある。そのうち、『増訂華英通語』の出版された1860（万延1）年までに出たものとしては、東北大学附属図書館狩野文庫蔵の1855（咸豊5）年刊のものと、ハーバード大学燕京図書館（The Harvard-Yenching Library）蔵の1860（咸豊10）年刊のものの2つが従来知られていた。

このたび存在が明らかになった大阪大学附属図書館蔵の版はそれらよりも6年ないし10年余り早く1849（道光29）年に出版されたものである。扉（封面）と序文の開始部分は失われているが、序文中に「～輯成此書名曰華英通語（～して本書を編み、『華英通語』と題した）」とあり、版心における書名の表示も「華英通語」である。後の版との関係から考えても、扉に記された書名も『華英通語』であったと推定される。また、大阪大学附属図書館には1860（咸豊10）年刊の版の巻上の所蔵も確認された。

『華英通語』の初期の3つの版と『増訂華英通語』の概要を比較しやすい形にまとめれば表1の通りである。作者および序文の著者の名は序文に記されたものをそのまま示したに過ぎず、それらがすべて実在の人物の実名であったかどうかは不明である。

1860（咸豊10）年刊『華英通語』の大阪大学蔵本の扉における蔵板者の表示は「恒茂蔵板」であるが、ハーバード大学蔵本では「恒茂蔵板」の上に香港の地名「西営盤」が小字で記されており、扉のほかの部分とは筆跡が異なる。おそらく大阪大学蔵本が初期の刷りで、ハーバード大学蔵本が後の刷りといった関係にあるのであろう。

以後、1849（道光29）年刊の『華英通語』を「道光本」、1855（咸豊5）年刊および1860（咸豊10）年刊の『華英通語』をそれぞれ「咸豊5年本」「咸豊10年本」と呼ぶ。

表 1　1860 年までに出版された『華英通語』諸版一覧

刊行年	書名	扉の表示	序著者	作者	所在
1849（道光29）年	『華英通語』	不明（欠葉）	鄭仁山		大阪大学附属図書館
1855（咸豊5）年	『華英通語』	咸豊乙卯 華英通語 協徳堂蔵板	何紫庭	子卿	東北大学附属図書館（狩野文庫）
1860（咸豊10）年	『華英通語』	咸豊庚申重訂 華英通語 恒茂蔵板	拙山人	子芳	大阪大学附属図書館（巻上のみ） ハーバード大学燕京図書館
1860（万延1）年	『増訂華英通語』	万延庚申 増訂華英通語 快堂蔵板	何紫庭	子卿著 福沢諭吉編訳	日本国内多数

2.2 『華英通語』を中心とする中国初期英語学習書間の継承関係

新出の『華英通語』道光本は、後に具体的に述べるように、跋文に 1843（道光 23）年の日付の記された羅伯聃（ロバートトーム）『華英通用雑話』上巻に頼って編まれている。英国人の著した英語学習書である同書は内田（1997）でも紹介されている。『増訂華英通語』の原本を論じた和田（1962）は「松本信広教授より『華英通用雑話』という題名の似た本を御教示頂いたが、これは英人 R. Thom が北京官話を用いて一八四三年に著した華英辞書で、広東語の『華英通語』とは全く別の本である」と述べているが、それは表面的な印象に基づく即断に過ぎない。『華英通用雑話』と『華英通語』――あるいは『増訂華英通語』――の内容を比較すれば、語彙集にも会話文例集にも重複が見出される。

『華英通語』の道光本と咸豊 5 年本は、書名は同じでも、別個の書籍と言ってもよいほどまでに内容が異なっている。しかし、書名の一致、構成や様式上の類似、一部の内容の重複を考えれば、咸豊 5 年本は現に道光本に基づいて作られた新版と見ることができる。

『華英通語』咸豊 10 年本は咸豊 5 年本を基礎としてそれに改変を施すという方法で作られており、両書は内容の共通性が高い。

筆者の分析による『華英通用雑話』から『華英通語』咸豊 10 年本に至る中国英語初期学習書間の継承関係の概略を図示すれば図 2 のようになる。

これ以後も『華英通語』の書名、構成、内容を大なり小なり継承した英語学習書は複数出版されているが、ここでは考察の対象を咸豊 10 年本までとする。

2.3 『紅毛番話』の類との関係

19 世紀の中国では『華英通語』より早くから『紅毛番話』などの書名を持つ英語の語彙集が出版されていた。その内容は内田・沈編（2009）に収められた資料 8 点の影印によって

1843（道光23）年　羅伯聃『華英通用雑話』上巻

↓ 複数の語学書を併用

1849（道光29）年　『華英通語』道光本（大阪大学蔵）

↓ 複数の語学書を併用

1855（咸豊5）年　『華英通語』咸豊5年本（東北大学蔵）

↓ 複数の語学書を併用

1860（咸豊10）年　『華英通語』咸豊10年本（大阪大学、ハーバード大学蔵）

図２　『華英通用雑話』から『華英通語』咸豊 10 年本に至る英語学習書間の継承関係の概略

知ることができる。[2]『紅毛番話』の類には出版年が記されていないが、1830 年代にはすでに出版されたものがあったことが入華プロテスタント宣教師サミュエル・ウェルズ・ウィリアムズ（Samuel Wells Williams、中国名衛三畏）の記述を通して知られている。[3]『紅毛番話』の類の語彙集は図 2 に示した一連の英語学習書に基礎を提供したのであろうか。

『紅毛番話』の類の語彙集に軽く目を通してみる限りでは、『華英通語』の系列の学習書に継承されたと見られる記述は見出せない。しかし、『紅毛番話』の類の内容をさらに精査するまでもなく、それらが『華英通語』系列の学習書の内容の出典として使われることはなかったと筆者は推定する。それは次のような判断による。

『華英通語』系列の学習書と『紅毛番話』類の語彙集のあいだには形式上一貫した違いがある。それは、『華英通語』系列では先述の通り各項目が中国語表現、対応する英語表現、その発音の漢字表記という 3 要素によって構成されているのに対し、『紅毛番話』類の各項目は中国語表現と、対応する英語表現の発音の漢字表記という 2 要素のみによって構成されていることである。例えば、図 3 に示した『紅毛番話貿易須知』[4]の例では、「油」

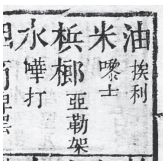

図３　『紅毛番話貿易須知』

[2] Hunter（1882）はアヘン戦争前の広東で語彙集と文例集から成る冊子が売られていたことを述べているが、そのような資料の現存は知られていない。

[3] Williams（1837）は、“中国人が英語の語彙集の手写本を持っているのは何度も見たが、最近『紅毛買売通用鬼話』とマカオのポルトガル語の語彙集とが出版されているのを初めて見かけた”ことを報告している。ウィリアムズは米国人であるが、“書名にある「鬼話」、すなわち、‘the devilish language’のような表現はポルトガル語の語彙集には使われておらず、これは中国人の英国人に対する根強い侮蔑の現れである”と不満を述べ、抗議している。

もっとも、Downing（1838）や Hunter（1882）の記述によれば、英国人だけが“鬼”扱いされていたわけではなく、あらゆる外国人が「番鬼」と呼ばれ、国ごとに専用の“鬼”の名称もあった。Hunter によれば、英国人は ‘Red-haired devils’ ――すなわち、「紅毛番」「紅毛鬼」――と呼ばれた。

[4] 内田･沈編（2009）所収の版と同じく蔵板者は富桂堂であるが、全面的に改刻され、本文の冒頭に「新

「米」「檳榔（ビンロウ）」「水」に対応する oil、rice、areca、water の各語の発音が漢字で示されている。このため、もし『紅毛番話』の形式の学習書に含まれる内容を『華英通語』の形式に仕立て直そうとすれば、漢字による発音表記から英字による表記を復元することが必要となる。しかし、その作業は困難を極めるはずであり、『華英通語』系列の学習書の作者があえてそのような負担の重い方法を選ぶ気になったとは考えがたい。

また、内容の面でも、『華英通語』はピジン英語（後述）の特徴的な要素――例えば、『紅毛番話貿易須知』に見られる「沙鼻（savvy、分かる）」「丫鏬心（all same、同じ）」「哪堅都（no can do、できない）」のような語句――を含まず、『紅毛番話』の類と一線を画している。

さらに言えば、以下の節で述べる通り、『華英通語』の各版の内容の出典は分析によってかなりの程度に解明することができた。出典不詳の要素も残ってはいるが、『華英通語』が全面的に他からの借用で構成されているわけでもなく、作者の英語の知識に基づいて準備されたと見られる内容もある。そうした意味においても、『華英通語』の内容の出典の候補として『紅毛番話』類を想定すべき必要性はもはや乏しい。

2.4　論述の方針

個々の英語学習書の考察に進む前に、論述上の方針を明らかにしておく。

まず、論述の多くの局面において本来必要な「調査の限りでは」とか「筆者の確認に誤りがなければ」といった断り書きは表現の簡潔のために基本的に省く。

資料の葉数と表裏は、第 1 葉表を「1a」、第 23 葉裏を「23b」のようにして示す。必要に応じて、学習書名の略称「雑」「道」「咸」「増」――『華英通用雑話』、『華英通語』道光本、『華英通語』咸豊 5 年本、『増訂華英通語』――を冠して「雑 1a」「道 23b」のように記す。葉数に言及する機会の少ない咸豊 10 年本については略称を設けない。

英語学習書に含まれる語句や文例を数えることは簡単なことのようで実はそうではない。その理由の 1 つは、図 2 に示した 4 つの学習書はいずれも個々の語句や文例を四角形の欄に収めて記しており、その欄を数えることは容易であるが、それは語句や文例の数に一致しないということにある。すなわち、1 つの欄の中に複数の語句が書かれていることもあれば、1 つの文例が複数の欄にわたって書かれていることもある。しかも、学習書間で内容が継承されるとき、その語句、文例と欄の関係が保存されるとは限らない。このことが特に問題となるのは『増訂華英通語』で、例えば『華英通語』咸豊 5 年本の 1 つの欄の内容は「父母 Parents 父 Father」（咸 13a）であるが、福沢はそれを 2 つの欄に分けて「父母 Parents」「父

刻紅毛番話」という内題が加えられている。同書はさらに、内田・沈編に収められた以文堂蔵板の『紅毛　話貿易須知』として翻刻されている。後者においては扉の書名中の「番」の字が何らかの方法によって消されているのであるが、「新刻紅毛番話」の内題はそのまま残されている。

Father」（増 5a）としている。このような例は少なくなく、したがって、2 つの学習書間の関係を考えるときには欄ではなく、語句、文例そのものによって比較しなければならない。以下の論述で示す語句、文例の数も欄ではなく、語句、文例自体の数である。[5] ただし、さらに語句と文例の区別も、また、複合的な発話における文境界も必ずしも明瞭ではないなどの問題もあり、語句や文例の認定が曖昧さを伴うことは避けられない。集計の方法によってそれらの件数は多少増減し得る余地がある。

また、語句、文例はその掲載回数を数える。学習書中に、内容が完全に、ないし、ほぼ一致する項目が複数回掲げられていることがある。例えば、『華英通語』咸豊 5 年本の語彙集において、「洋靛 Prussian blue」という項目は「顔色類（色彩類）」と「通商貨類」の 2 か所（それぞれ 42a、57a）に挙げられている。[6] 扱いに迷う要素もあるが、統合の基準を定めることもむずかしいので、重複する掲載をすべて別個に数えることにする。

最後に、英語の複合的な表現の異表記は区別することなく扱う。例えば、shoemaker という語が shoe-maker や shoe maker のように記されていても、すべて同一のものと見なす。これにより多少の情報を失うことになるが――『増訂華英通語』に認められる、複合語を分解して示す傾向は分析できなくなる――、手書きの筆記体ではしばしば異表記間の関係が不明瞭で、区別しようにも限界があるのである。

3 『華英通用雑話』上巻

『華英通語』系列の英語学習書の起点と見なし得る『華英通用雑話』上巻から検討を始める。

3.1 ロバート・トームと『華英通用雑話』

『華英通用雑話』上巻は英国商人ロバート・トーム（Robert Thom、羅伯聃）がアヘン戦争直後の 1843（道光 23）年に出版した英語学習書である。英語の書名は *Chinese and English Vocabulary,* Part First である。

Bridgman（1847）に引用されている *The Glasgow Chronicle* 紙の記事によれば、トーム

---

5 欄と内容の関係は多様である。『華英通語』咸豊 5 年本を例に取れば、「父母 Parents 父 Father」（13a）のほかに「斧，釘 Axe, nail」（92a）のように書かれた欄もある。これらにおいては、1 つの欄に 2 つの項目――中国語と英語の対――が収められていると言える。また、「医先 Physician, doctor」（15b）、「錫 Pewter or tin」（20a）のような欄においては中国語 1 語に対して英語が 2 語示されている。ここではそうした複雑な内容の欄は分解、単一化して扱う。すなわち、上記の 4 つの欄を、「父母 Parents」「父 Father」「斧 Axe」「釘 Nail」「医先 Physician」「医先 Doctor」「錫 Pewter」「錫 Tin」という 8 個の項目として扱う。

6 項目の重複は、多くの場合、学習書の編集に複数の出典が用いられていることに起因する。本文に挙げた「洋靛 Prussian blue」の重複は同一の出典の異なる文脈の 2 か所にそれが現れることによる。

は1807年にグラスゴーの名家に生まれた。商才に長け、英国、ベネズエラ、メキシコで働いた後、1834年、26歳のときに中国に渡り、再び帰国することはなかった。語学の才能にも秀で、仕事の余暇には、また、睡眠を削って中国の言語、文学の学習に打ち込んだ。他人の役に立ちたいという思いから、1843年には『華英通用雑話』を自費で出版し、公的機関や南京条約（1842（道光22）年）によって開かれた5港――広州、福州、廈門（アモイ）、寧波、上海の各港――に住む人々に配布した。1840年以後は英国政府の仕事に従事し、その功を認められて1844年には寧波の英国領事に任命されたが、2年後に病のために39歳で没した。熱意、無欲、精神の活発、全般的能力、秀でた商才、決断と強固な意志、親切、驚くべき洞察力、気前のよさ、高潔な精神、勇敢、そういったことがトームと知り合うことのできた誰もが迷わず認めるトームの人柄の特徴であった。

この最後の賛辞に表されたトームの特質、性向は、後に述べる通り、その語学書にも反映されている。

3.2 『華英通語』系列の起点としての『華英通用雑話』

『華英通用雑話』は英国との貿易に携わる中国人に、当時広東を中心に通用していたピジン英語、すなわち、‘Canton English’[7]に取って代わるべき正統な英語を教えるために編まれた英語学習書であり、序文、凡例、跋文などと、40葉から成る本文とから成る。本文は「生意数目門（商売・数の部）」（1a ～ 18b）と「日常口頭語」（19a ～ 40b）という2つの部分に分けられている。いずれもその内容は語彙集と会話文例集である。

語彙集に挙げられた項目は「生意数目門」と「日常口頭語」を合わせて約1,100件、会話文例集の項目は両部分を合わせて約240件である。語句の列挙が文の一部を構成していたりもする――例えば、日本語で書けば、「ほかに家庭用品もあります。」「例えば、輿（こし）」「ベッド」「たんす」「机」「服掛け」「テーブル」「いす」等々のような形で多数の物品名が挙げられていることがある――などの事情のために、語句と文例の数を明確に定めることはできない。

半葉が最大で4段×5列、20個の縦書きの欄によって構成されている。各欄に収められた語句、文例は、中国語表現、対応する英語表現、その発音の漢字表記――中国語表現、英語発音の表記とも北京官話に基づく[8]――という3つの要素から成る。ただし、数詞の項目

---

7 ‘Canton English’は広東のピジン英語に対する西洋人の呼称であり、早くはLindsay and Gützlaff（1833）に使用が見られ、Williams（1836）、Downing（1838）にはその解説や例示がある。‘Canton English’を翻訳すれば「広東英語」になり、実際現在ではそのように訳されるが、当時の中国語におそらくそのような名称はなく、もしあったとしても一般的ではなかった。「英語」という言語名は19世紀前半にはまだ普及していなかったからである（拙論（2018））。本文ではそのことを明確にし、誤解を防ぐために、「広東英語」という後年の訳語を避けて‘Canton English’と表現した。

8 トームは凡例で“英語発音の漢字表記はすべて「正音」によった”と説明している。これについて内田（1997）は、「この『正音』は実は『北方官話音』とは言いがたい面がある」ことを指摘し、「『正音』

ではアラビア数字による表記が加わって例外的に要素が1つ増える。

『華英通用雑話』の内容はおそらく基本的にトーム自身によって独自に準備されたものと思われる。

もっとも、例外があり、会話文例の一部が高静亭『正音撮要』の「見面常談（人に会ったときのよくある会話）」から取られていることを内田（1997）が指摘している。『正音撮要』は1810（嘉慶15）年に書かれた中国人のための北京官話の学習書であり、著者の高静亭は現在の広東省南海市出身の人物である（王（2006））。『正音撮要』には複数の版の残存が知られているが、そのうち『華英通用雑話』よりも刊行の早いのは1834（道光14）年のものだけである（王（2006）、黄（2013））。

具体的には、「日常口頭語」の29b ～ 34aに掲げられた会話文が上記の版の『正音撮要』巻一上の21a ～ 24bから取られている。『正音撮要』と『華英通用雑話』の内容を比較してみると、『華英通用雑話』では『正音撮要』の原文にあった解説、一部の文例、対話の進行を示す説明――「問道（尋ねて言う）」「答道（答えて言う）」など――が省かれているほかは、次の加点を施した2か所が原文と異なっているだけである。以後、引用中の漢字は原則として現代日本の字体による。

> 去年令尊寿誕令郎又栄娶我還没給你道喜呢 last year on your father's birthday and your son's marriage, I did not wish you joy! 実在短礼得狠了 I was certainly very rude! (30a)
>
> 大哥你是個大才大用的人為甚麼不出門我点事業做做呢 my friend! you are a clever and useful man! why don't you go abroad, and look out for something to do? (31a)

第1の例の「実在」は原文になく、『華英通用雑話』において補充されたものである。[9] 第2の例の「我」は原文の「找（探す）」の誤写である。

このように先行する資料から内容が取られているにせよ、『正音撮要』は中国語の学習書であり、したがって、『華英通用雑話』が一連の英語学習書の起点であることには変わりがない。そして、語句や文例の対訳を四角形の欄に収めて示すという様式上の特徴も『正音撮

とは『南京官話』をその中心とする『南方音』と見なすのが妥当であろう」と述べている。しかし、トームは巻末の後記の後に置かれた 'To the Reader' と題する英文では 'the Peking or Court dialect' の発音によったと明言している。トームの記述と内田の指摘する南方音的特徴の事実とを両立させるには、トームの意図した北京官話音による表記に南方音による表記が混入したと解釈するのが妥当であるのかも知れない。内田によれば、語彙の面でも「『南北混淆』の現象が存在している」と言う。

9 可能性としては、トームは筆者の参照した版とは異なる『正音撮要』を用いており、そこには「実在」が含まれていたということもあり得る。しかし、そのような異版の存在は知られていない。

要』にはなく、かつ、以後の『華英通語』系列の学習書に引き継がれた特徴である。

なお、上掲の例に見る通り、『華英通用雑話』における英語の文例は、人称代名詞のＩまたは固有名詞で始まるものを例外として、ほとんどの場合小文字で書き始められている。これはトームが英字の大小の区別に無頓着だったということではなく、学習者の負担に対する配慮から大文字の使用を避けたものと見られる。本文中に挿入された英語の序数表現や重量単位に関する解説（2b、3a）および巻末に置かれた英文においてはすべての文頭に大文字が使われており、文例における文頭の小文字表記が英語の正書法からの意識的な逸脱であることが確実である。

3.3 『華英通用雑話』の特性と評価

『華英通用雑話』の内容に接して筆者の抱いた感想が２点ある。

その１つは、同書が語学書として特異な面を有するということである。それは、同書は語学書でありながら、トームの個人的な信条、価値観を濃厚に反映しているということである。トームは、語学書の文例という文脈を利用して、自身が中国に住み人々と接する中で感じた困惑を吐露し、人々の教化を図ろうとしている。それが最も明確に現れているのは、「生意数目門」最終葉の全面（18a ～ 18b）を使って掲げられた、「你聴我説」で始まり「我這些話不要忘記了阿」で終わる一連の文例である。英語の部分だけを引用すれば次の通りである。これは『華英通用雑話』では１つの長文ではなく、ここに含まれる多数の短い表現のそれぞれが文例ないし語句とされている。読みやすさのために文頭は大文字に変えて示す。

> Listen to me! In trading, you must be just, and honest, and serious, and circumspect, and attentive, and take great care! Be diligent and active, diligent and cautious, economical, and respectable. You must not be lazy, nor be a busy-body, nor hinder business, nor be unsteady, nor trust all people, nor break your word, nor deceive people. If you deceive people, HEAVEN will not be pleased! In speaking, you must speak truth, and be polite, and pronounce properly, and speak fluently. Say “one” is one, say “two” are two. Don’t answer at random, don’t make fools of people, don’t insult people, don’t abuse people, don’t bully people, don’t talk vulgarly, don’t speak loud, don’t bawl & make noise. No matter where a man goes, he must always speak reason. These words of mine, you must not forget!　（18a ～ 18b）

「你聴我説」と「我這些話」の「我」は明らかにトーム自身である。著者が語学書中に第一人称として登場し、読者に対して誠実、勤勉、正直、マナー、理性などの重要性を訴えか

けている。キリスト教宣教師による語学書にも神や道徳に関わる文例は現れるが、『華英通用雑話』では著者が自らの個人的な思いを語っている。これはもはや通念的な語学書の範囲を超えていると言える。

「日常口頭語」において『正音撮要』から引用された文例も精神上それに近く、すべて会話の相手に対する配慮や謙遜の表現である。対話者の一方は以前に贈り物を受けて礼を言わなかったことを詫び、他方は粗末なもので礼に値しない、礼を言われては自分が恥ずかしいと返すといった調子のやり取りの文例の連続である。トームはそうした礼儀や配慮を特に重んじたと思しく、3年後に出版した別の語学書でも同じ箇所を引用している（後述）。

そして、『華英通用雑話』の本文は次のような文例の連続で締めくくられる。ここでも、「日常口頭語」最後の半葉（40b）の内容のうち英語の部分だけを長文の形につないで引用する。

> The good man does not remember injuries. The good man repays evil with good. The good man indeed is a friend in need. A good man's word is his bond. Men leave to their children baskets filled with gold, and I give for their instruction THIS LITTLE BOOK! A Consul, an Interpreter, or linguist. End of Part First. （40b）

『華英通用雑話』について筆者の抱いたもう1つの感想は、初学者のための英語学習書として本書を評価すれば、これだけでは英語は学べないということである。それは、語句や文例があるだけで文法の解説がほとんどなく、語彙集には冠詞やbe動詞のような重要語すらないからである。トームは巻頭の凡例で“英単語を使ってどのように文章を組み立てるかは下巻で説明する”と述べており、結局刊行されることのなかった下巻（後述）で文法を解説する考えであったのかも知れない。いずれにせよ、本書を学習に役立てるには、すでに英語の基礎を身に付けているか、教師のもとで学ぶことが必要であったろう。

以後の『華英通語』も『華英通用雑話』の記述方法を踏襲し、したがって、初学者の独習には使えないという問題をそのまま残している。もし『華英通用雑話』の内容が違っていれば、あるいは、下巻が出版されて文法が説明されていれば、その後の英語学習書もまた違った内容のものになっていたことであろう。

4 『華英通語』道光本

大阪大学附属図書館蔵の『華英通語』道光本は、19世紀中国の英語学習書の展開において『華英通用雑話』と『華英通語』咸豊5年本の中間に位置する。現在確かめ得る『華英通語』の最も早い版であり、そして、おそらく最初の版である。

道光本は『華英通用雑話』のほか西洋人宣教師による広東語学習書 2 種類を用いて作られている。

4.1　道光本の概要

『華英通語』道光本は新出の資料であるので、その概要をやや詳しく述べる。

4.1.1　外形、構成

『華英通語』道光本の判型は 12.2cm × 17.4cm で、後の咸豊 5 年本や咸豊 10 年本に比べてやや小さい。

大阪大学蔵本に「道光版 華英通語」と墨書された表紙は付いているが、それに続く本体は 1849（道光 29）年に鄭仁山なる人物によって書かれた序文の途中から始まる。表紙に破損がなく、その内側の扉や序文にのみ欠葉や傷みが生じていることなどから考えて、表紙は出版後に補修、補強のために加えられたものと見られる。残存する序文も状態がよくないが、かろうじて判読できる版心の葉数から、欠葉はおそらく扉と序文第 1 葉の計 2 葉であると推定される。表紙の見返しに「大阪外国語学校図書」「大正十二年十一月十四日」という内容の収書印、残存する序文の冒頭に同校蔵書印の押印がある。

本体の構成は、失われた扉を別とすると、序文（欠葉を含め 3 葉半）、英字に関する説明（1 葉半）、目録（半葉）、凡例（半葉）に始まり、その後に 137 葉から成る本文が続き、最後に帳簿や伝票の記入例（5 葉）が置かれた形になっている。

全文を参照できない序文の解釈は、本書の作者が誰であるのかという問題と直結している。これについては本書の内容を確認した後にその結果も考慮に入れて読解を試みる。

4.1.2　本文

『華英通語』道光本の本文の様子を図 4 に示す。咸豊 5 年本以後の『華英通語』と異なり、漢字、英字ともに字体が素朴である。特に、未熟な筆記体で記された英語には当の語を知らなければ文字を判読できないところも多い。

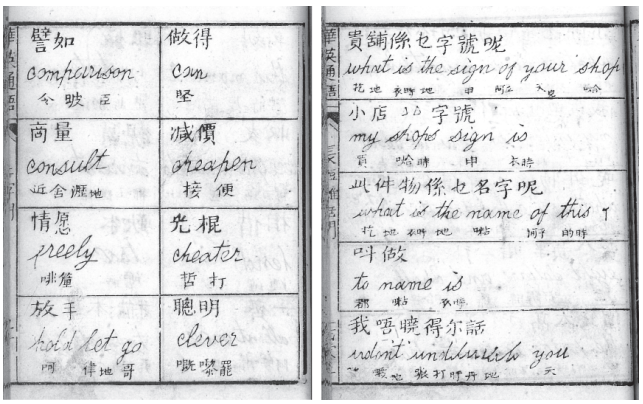

図 4　『華英通語』道光本の本文

本文は次の 33 の「門」に分けられている。一部の門は

「門」の字を欠く。本文と目録とで類名が異なるものについては目録での表示を括弧内に示す。

数目門、時日門、身上所用什物門、大餐各器用門 器具、牲口、牲肉、炮製、魚蝦、雑項、酒名、瓜菜、菓子、房内什物門、写字房什物門、家内什物門、出口貨門、入口貨門、人倫門（人文門）、各埠名門、船隻門、建造門、天文門、地理門、身体門、疾病門、薬材門、顔色門、草木門、禽獣虫蟻門、一字門、二字門、三字門、長短雑語門[10]（長短雑話門）

「数目門」に始まり「一字門」「二字門」「三字門」に至る最初の32門がおおむね語彙集、最後の「長短雑語門」が会話文例集である。最初の32門に挙げられた項目は約1,650件、「長短雑語門」の項目は約350件である。ただし、「二字門」と「三字門」にも少数の短文が含まれている。[11]

『華英通用雑話』と同じく、語句や文例の各項目は中国語表現、英語表現、英語の発音の漢字表記という3つの要素から成り[12]、例外的に数詞の項目では要素が1つ増える。ただし、『華英通用雑話』と異なり、中国語表現と英語発音の表記は広東語に基づいている。

項目を欄に収めて掲げる様式も『華英通用雑話』と共通である。しかし、書字方向が異なり、『華英通用雑話』では縦書きの中国語を基礎とし、英語はそれに合わせて右に90度回転させていたが、道光本では図4に見る通り中国語、英語とも左から右への横書きである。半葉ごとの欄の数は語彙集では基本的に4段×2列の8、会話文例集では5段×1列の5である。ただし、一部に例外もあり、例えば漢字1字語を表す英語の語句を挙げる「一字門」では4段×3列の12である。

4.1.3　収書の経緯ほか

大阪外国語学校は同校編（1924）によれば1921（大正10）年12月に設立された官立専門学校であり、大阪外事専門学校、大阪外国語大学、大阪大学外国語学部の前身である。同校に『華英通語』道光本が『華英通語』咸豊10年本とともに収められるに至った経緯につい

---

10 本文の一部の葉の版心では「長短雑話門」とされるなど、表記が一定しない。

11 それらの少数の短文もここでは語彙集の一部として扱う。そのように一律に扱わなければ、本小論の記述を後に検証することができなくなるからである。語彙と文例の区別は必ずしも明確ではない。例えば、「二字門」に含まれる「開門 open the door」（87a）という項目は語彙の例とも――正確に言えば文法上生産的に組み立てられる動詞句であるが――、また、命令文の文例とも考えることもできる。後の版の『華英通語』の語彙と文例についても同様に扱う。

12 一部の語句の項目ではさらに語義その他に関する解説が小字で書き添えられている。例えば、「時日門」の「耶穌生辰 christmas day」（4a）には「漢人云做冬是也（中国人の言う「做冬」である）」という説明が加えられ――「做冬」は冬至に一家団欒で食事をする広東の風習――、「一字門」にある「生」の2項目では「生肉之生 raw」「生死之生 live」（ともに69a）として2義の違いが示されている。

ては、同校の『自大正十二年度 至大正十四年度 図書原簿』に多少の手がかりが見出される。すなわち、同原簿の記載によれば、道光本、咸豊10年本ともに納入日は1923（大正12）年11月14日であり、備考欄には共通して「支」の表示がある。このことから、両書は当時同校唯一の支那語部教授であった井上翠（みどり）、または、唯一の同助教授であった吉野美弥雄（みやお）の判断によって購入されたものと推定される。[13]

井上は、その自伝（井上（1950））によれば、姫路の中学校を中途退学の後小中学校教員として働き、比較言語学研究の希望を抱いていたが中国語に転向し、1902（明治35）年27歳のときに東京外国語大学の前身である東京外国語学校（1899（明治32）年設立）清語科別科に入学して学び、卒業後日本語と中国語を教えた後、1906（明治39）年に32歳で北京の法政学堂に日本語教師として赴任して4年間勤務、帰国後は中高勤務を経て1922（大正11）年の大阪外国語学校開校時に教授として迎えられた人物で、『井上支那語辞典』（1928（昭和3）年）、『井上日華新辞典』（1931（昭和6）年）などの著作がある。吉野にも中国語の辞書や教科書の著作がある。

道光本の表紙には「道光版 華英通語」と墨書され、咸豊10年本では表紙に印刷された「華英通語 巻上」という書名の右上脇にやはり墨書によって「咸豊」と書き添えられている。記入は明らかに2種類の『華英通語』の対比に価値を見出した者によるものと言える。現代の我々よりも1世紀近くも早く『華英通語』の異版間の関係に着目したその人物が誰であったかは残念ながら詳らかではない。

井上は大阪外国語学校赴任前に勤務していた山口高等商業学校に『日清語字典』と題した辞書草稿を後年（1936（昭和11）年）寄贈しており、現在は山口大学図書館の所蔵となっている。[14] 加筆や修正の多い草稿は自筆によると見られる。しかし、筆跡の比較に基づく筆者の判断によれば、『華英通語』2冊の表紙への記入は井上によるものではない。また、表紙への記入の筆跡は『図書原簿』の当該項目の筆跡にも、当時大阪外国語学校に言語学の講師として出講していた新村出の筆跡にも一致しない。さらに、両書の書名は『図書原簿』においてもすでに「道光版 華英通語」「咸豊華英通語」と記されている。以上のようなことから考えて――吉野の筆跡は確認できていないが――、また、研究者や図書管理者が咸豊10年本の表紙に直接墨書するものだろうかという疑問も考え併せれば[15]、表紙の墨書は大阪

---

13 備考欄には「支」の表示に加えて共通の納入者名「王樹」が記されている。中国人の名のように見えるが、仔細は不明である。『図書原簿』の記録によれば王樹は中国書専門の業者であるわけではなく、日本の古書も納入している。

14 草稿は1911（明治44）年のものである。稿末に「四十四年八月三十一日午後十一時第一回浄書完了」と記されている。

15 道光本の表紙はおそらく補強のために加えられたもので、そこに書名を記入することはあってもよいと思われるが、咸豊5年本はもとの出版物そのものである。

外国語学校への納入以前の段階でなされたものであるようにも思われる。

1849（道光29）年に中国で出版された『華英通語』道光本がその74年後の1923（大正12）年に大阪外国語学校に収められるまでにどのような経路をたどったのかということも興味深い問題である。すなわち、中国で流通した英語学習書が20世紀になって古書として日本にもたらされたのか、それとも、出版から間もない時期に日本人による使用のために日本に輸入されたのかということである。事実はおそらく後者であったことが後述の事情から知られる。

4.2　道光本の依拠資料

『華英通語』道光本の内容の多くは『華英通用雑話』を始めとする先行する語学書から取られている。

4.2.1　語句の出典

『華英通語』道光本の本文に挙げられた約1,650件の語句のうち、少なくとも約1,100件の出典は確かめることができた。すなわち、まず『華英通用雑話』から330件以上の語句が取られている。そして、さらに多くの語句が西洋人のための広東語の入門書であるトマス・デバン（Thomas T. Devan、徳万、吔凡）の *The Beginner's First Book in the Chinese Language (Canton Vernacular)*（1847（道光27）年）から取られている。その数は控え目に見積もっても約770件に及ぶ。道光本における葉数の情報を加えて表の形にまとめれば表2のようになる。

表2　『華英通語』道光本の語句の出典

出版年	出典名	道光本での場所	件数
1843（道光23）	羅伯聘『華英通用雑話』上巻	1a～7b, 31a～39a, 44b～47a, 53a～55b, 62a～63b, 75a～78a, 91a～92b他	330超
1847（道光27）	Thomas T. Devan *The Beginner's First Book in the Chinese Language (Canton Vernacular)*	8a～31a, 39b～44b, 47a～52b, 55b～61b, 66a～69b, 80a～89b, 98a～99a他	770超

先行する語学書からの語句の借用、継承の件数を確定することはできない。なぜならば、一般的な語句は多くの語学書に挙げられるので、新旧の語学書に同一の語句が現れても、そのことは必ずしも借用を意味しないからである。借用を認定できるのは、偶然によっては生じがたい一致の要素が認められる場合に限られる。例えば、数件以上の語句の掲載順が理由もなく一致している、特定の意味領域の数ある語句から選び出された語句の範囲が一致している、英語の綴りに共通の誤りがあるなどの場合である。

『華英通用雑話』の語彙集からの借用は例えば次の一連の語句――英語だけを示す――に関して推定される。これらは両書においてほぼ共通の順序で現れる。

scarlet, prussian blue, sky blue, light blue, dark blue, gentian blue, carmine, ash, lilac, tea color　（雑 8a ～ 8b、道 62b ～ 63a）

formerly, afterwards, before, after, just now, this instant, this time, last time, next time, the time before　（雑 21a、道 75a ～ 75b）

weigh cargo, measure cargo, bring it, take it away, too heavy, very light, too long, very short, gold, sycee silver, foreign money, Spanish dollars, Mexican dollars　（雑 3a ～ 3b、道 76b ～ 77a）

ただし、『華英通用雑話』から項目を借用する際、北京官話による中国語の表現が広東語に書き換えられている場合もある。これについては文例の借用のところで例示する。

件数の多いデバンの広東語入門書からの語句の借用は道光本のより多くの門に及ぶ。語句の出現順序がしばしば両書で一致しているほか、順序が一致しない場合でも、個々の意味領域から選んで挙げられた語句の範囲の共通性が高いとか、中国語と英語の対訳関係は本来多様であるにもかかわらず訳語が一致することが多いといった事実から、借用を推定することができる。親族名称に関して両書とも brother、nephew、niece は単数形で示しているのに sisters は複数形になっている（Devan 8 ～ 9 頁、道 39b ～ 40b）[16]といった事実も借用を示唆している。

デバンの広東語入門書から借用された語句の数は 770 件よりも相当多いものと思われるが、それでも出典の不明な語句は数百件残る。『華英通用雑話』とデバンの広東語入門書以外にも使われた資料があった可能性は考えられるが、すべての語句が出典を持つわけでもない。一部の語句は、道光本の作者が先行学習書の語彙集の不足を補う目的で独自に補充したものと見られる。例えば、親族名称の箇所では、米国人宣教師であるデバンが「兄弟 brother」だけを挙げて済ませているところに「兄 old brother」と「弟 young brother」を加えている（Devan 8 頁、道 39b）。

4.2.2　文例の出典

道光本の文例の出典は全面的に確かめることができた。先に約 350 件と記した文例数は筆者の集計では 357 件であるが、それらは表 3 に出版年順に示す 3 件の語学書から取られてい

16 デバンは英語の語句を大文字で書き始めているが、記述の簡潔のために、学習書の対比の文脈では小文字に統一して引用する。

る。少数の文例においては原文が改変されたり誤写が生じたりしている。

表 3 『華英通語』道光本の文例の出典

出版年	出典名	道光本での場所	件数
1841（道光21）	Elijah Coleman Bridgman *A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect*	136a～137b	15
1843（道光23）	羅伯聃『華英通用雑話』上巻	100a～118a	162
1847（道光27）	Thomas T. Devan *The Beginner's First Book in the Chinese Language (Canton Vernacular)*	118a～136a	180

道光本における排列順に従ってそれぞれの出典からの借用の状況について補足すれば、まず 100a ～ 118a の範囲では『華英通用雑話』の文例が利用されている。[17]

ただし、文例の中国語文は広東語を用いて書き換えられている。若干の例を示せば次の通りである。Chinese、I の道光本での表記は chinese、i である。

can you speak Chinese?——I can't speak Chinese.

你会説漢語麼——漢語都不会説 （雑 4b）

尓(会)暁講漢話(不)唔呢——漢話都唔暁講 （道 101a）

what is the price of this?——eight dollars and a half.

這个東西売甚麼価銭呢——売八塊洋銭半 （雑 13b）

(這)呢件物係(是)乜(什麼)野価銭呢——売八員半啫 （道 102b）

続く 118a ～ 136a の範囲の文例はデバンの *The Beginner's First Book in the Chinese*

17 トームが巻末の後記で断っている通り、『華英通用雑話』には板刻の未熟により一部に判読の困難な箇所があり、そのために『華英通語』道光本には英語を誤読した引用がある。次に示すのは道光本の一部であるが——第 1 の例は図 4 に含まれる——、英文の下線部は明らかに正常でない。

此件物係(是)乜(什麼)名字呢 what is the name of this?——叫做 to name is （道 102a）

(這)呌様醜貨 such bad cargo 莫説売 not to speak of selling 就係送我 that you made me present of it 我都不要嚇 i would not want it （道 106b）

これらの文例は『華英通用雑話』では次のようになっている。ここで「***」によって示した判読困難の箇所は確かに to、that のように見えなくもないのであるが、それでは文法上も意味上も通らない。

這箇東西叫甚麼名字 what is the name of this?——叫做△△ *** name is ... （雑 13b）

這様儳頭的貨 such bad cargo, 莫説売 not to speak of selling, 就是送他 *** you made me present of it, 我倒不肯 I would not want it! （雑 14b）

第 1 の例の "*** name is ..." については発音が「衣(三字合)的士 尼(合)密 衣(合)士」として示されているので、*** の部分は正しくは its であることが分かる。第 2 の例における "*** you made me present of it" の *** は文法や意味の点で考えて if で、"これほどひどい商品はただでやると言われても要らない" ということであろう。その推定は「呲(合) 尤 密(合)的 米 必(合)喱(合)森(合)的 亜(合)弗 衣(合)的」という発音表記に合致しないが、『華英通用雑話』で if の発音は「衣(合)非」として示されており、「呲」をその誤刻と見れば問題は解消する。（発音表記は縦書きで、「合」は左側に配されている。「衣(合)非」の上半分——すなわち、「衣」と「合」の上部——が失われ、「非」が字形の似た「托」に取り違えられれば、結果は「呲」になる。）

Language (Canton Vernacular) から取られている。ただし、デバンの文例の多くは *A Lexilogus of the English, Malay, and Chinese Languages; Comprehending the Vernacular Idioms of the Last in the Hok-Keen and Canton Dialects*（1841（道光 21）年）――表紙には英華書院（The Anglo-Chinese College）[18]印刷とあるだけで著者名の表示がないが、Möllendorff（1876）の中国関係著作目録は当時同校の校長であったジェームズ・レッグ（James Legge、理雅各）の著作としている――に基づいており、該書が道光本の文例の出典であるようにも見える。しかし、デバンはレッグの語学書から文例を引用する際に表現を多少変更している場合があり、道光本にはその改変後の文例が挙げられている。したがって、道光本の作者はレッグではなくデバンの語学書を利用したことが分かる。

道光本の本文の最終部である 136a ～ 137b の範囲に含まれる文例は、やはり広東語の学習書であるイライジャ・コールマン・ブリッジマン（Elijah Coleman Bridgman、裨治文）の *A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect*（1841（道光 21）年）から取られている。しかし、利用された文例の数は 15 件と少ない。わずかな文例のためになぜわざわざ第 3 の語学書が使われたのかという疑問があり得るが、実は文例の内容がその直後、道光本の巻末に配置された帳票類の見本に関わっている。これについてはすぐ下の項目で述べる。

なお、英語の文例を小文字で書き始めるという『華英通用雑話』の方針はそのまま引き継がれ、デバン、ブリッジマンの語学書から取られた文例も文頭の大文字が小文字に変更されている。そして、『華英通用雑話』と異なり、代名詞の I と大半の固有名詞にも小文字が使われている。

4.2.3　帳票類の見本

道光本の巻末には帳簿や伝票の記入例が 5 葉にわたって掲げられている。一見したところでは本文と関わりを持たないように見えるが、実は一部の文例と呼応している。

道光本でブリッジマンの *A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect* から取られ、本文の最後、すなわち、帳票類の見本の直前に置かれた文例（136a ～ 137b）の一部は、内容上金銭の収支に関わっている。出典における関連の文例と付表から英語の部分だけを引用すれば次の通りである。主人と執事の対話が 2 文ごとに番号を付して掲げられ、表には食材費の明細が示されている。

11. Do you keep an account of the daily expenses of the house?
    Yes, I keep a daily account with my own hand.

---

18 英華書院は、ロンドン伝道協会（The London Missionary Society）が 1818（嘉慶 23）年にマレーシアのマラッカに設立した学校。アヘン戦争後、1843（道光 23）年に香港に移転した。

12. Bring yesterday's account for examination.
    I have already brought it, and here it is.
13. What are the items of it?
    Do you, sir, wish me to read it to you?
14. Yes, and read it very slowly and distinctly.
    [It is as follows:]

	Catty.		Can.		T.m.c.
Rice,	2½	at	4	is	0 1 0
Beef,	4	"	9	"	0 3 6
Sugar,	10	"	8	"	0 8 0
Flour,	8	"	5	"	0 4 0
Eggs,	12	"	5	cash	0 0 6[19]
				Total,	1 7 2

(Bridgman 170 頁)

表の最初の行にある 'Catty' は重量単位の斤、'T.m.c.' は tael、mace、candareen の頭文字で通貨単位の両、銭、分を表す。'Can.' はおそらく candareen の略で、分で表した斤単価であろう。例えば Rice の項目に対応する中国語文は「白米二斤半四算銀一銭」で、"白米 2 斤半を斤単価 4 分で購入して 1 銭" という計算を表している。

道光本に掲げられた帳簿の見本の 1 つは「飲食数格」という見出しを与えられた食材費の明細で、ブリッジマンの表とは形式が多少異なるが、複数の食材の量や価格および総計が記されている。

ブリッジマンの広東語学習書は西洋人のためのものであるが、道光本では貿易その他の状況で英国人と直接ないし間接に関わる中国人が英語による帳票を読み書きする方法を学べるようその記入例が掲げられたのであろう。いずれにせよ本文と巻末の付録のあいだに関連があるということであり、雑多な内容の寄せ集めにも見える英語学習書がそれなりに構成に配慮して作られていることを物語っている。[20]

---

[19] この「0 0 6」は正しくは「0 6 0」でなければならない。対応する中国語文でも「銀六分」になっているが、正しくは「銀六銭」である。続く会話で主人は "計算に誤りがあるから算盤を持って来てもう一度計算せよ" と語っているので、意図的に誤った金額を示したのかも知れない。もっとも、執事は "すでに 2、3 度計算したから再計算の必要はない" と応じ、主人もそれ以上追求していない。

[20] ブリッジマンは前書きでトームに言及し、"第 5 章、第 6 章の通商に関わる内容を準備してくれた" ことについて謝意を述べている。ブリッジマンの広東語入門書から道光本に借用された文例はすべて第 5 章、第 6 章におけるものである。

4.3　道光本の特性と評価

『華英通語』道光本は、その後の版の『華英通語』に継承される書名、構成、体裁などを提供したという意味において、中国の初期英語学習書の展開に決定的な影響を与えたと言うことができる。

道光本は、初学者のための英語学習書として見たときの『華英通用雑話』の不足をそのまま引き継いでいる（3.3）。語彙集と文例集を明確に区別しない学習書の構成、すなわち、意味領域ごとの語彙の後に意味とは無関係の「一字門」「二字門」「三字門」が続き、そこに文例が混じり始め、最後は文例だけの「長短雑語門」になるという記述方法は現代の目で見れば合理性を欠く。もっとも、これは時代的な制約によるものと受け止めるべきであろう。

語彙を多数の門に分けて提示する方法は『華英通用雑話』にはなかった特徴であるが、道光本の独創というわけではなく、いわゆる類書の伝統を踏襲したものである。外国語に関わるものとしては、14 世紀以来の明清代に編纂された『華夷訳語』の類――漢族の言語と他民族の言語の官撰対訳語彙集――に同様の分類が見られる。[21]

語彙集には茶葉や織物を初めとする各種の輸出入物品の種類を表す名称が多い。現代の語学の入門書にこのようなものが多数掲載されることはないが、1849（道光 29）年に出版された本書の時代背景と出版目的に照らせば、すなわち、南京条約に基づいて 5 港が開かれ、年々盛んになる西洋との貿易に従事する中国人のための英語学習書として本書が編まれたことを考えれば怪しむに足りない。ちなみに、「出口貨門（輸出商品の部）」の冒頭に挙げられているのは「茶 tea」（30a）であり、「入口貨門（輸入商品の部）」の冒頭に挙げられているのは「鴉片 opium」（35a）である。トームが『華英通用雑話』に列挙した輸入商品にはアヘンは含まれない。

4.4　序文の解釈――道光本の作者と執筆の経緯

『華英通語』道光本の序文は第 1 葉を欠き、第 2 葉と第 3 葉も破れて一部の文字が失われている。

鄭仁山なる人物によって書かれた序文は同定のむずかしい文字をいくつか含むが、まず読解、解読の結果としての文面を示せば次の通りである。[22]「□」は欠字を表す。句読点や引用符は原文にはなく、すべてここでの補充による。

---

21 例えば、蒙古語の語彙集である火原潔撰『華夷訳語』（1389（洪武 22）年）は語彙を「天文門」「地理門」「時令門」「花木門」「鳥獣門」に始まる多数の門に分けて記述している。同様の語彙分類は『紅毛番話』の類（2.3）にも見られ、また、道光本に一部の文例を供給しているブリッジマンの *A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect* は西洋人による著作であるが書籍全体が話題の分野の詳細な分類に基づいて構成されている。

22 当初の翻字に含まれていたいくつかの誤字を陳力衛氏のご教示に基づいて訂正した。

一，不知其二。英商之始至我広東而貿易也，我漢人不諳其言詞。及至日久月長，洋務中遂有学習其語者，然究之総不能□□□。所以英商□□□□□□英吉利，其由来者如此。□曰："夫如是，当此盛朝之世，彼此通商，言語不通，情意焉能愜洽。今君之学習英人字話者，業有年矣。英書之奥妙亦可以尽知，何不繙訳一書以伝于世。況西蔵有訳，蒙古有訳，西洋有訳，豈于英吉利而独不為之一訳乎。"予曰："唯唯"，帰而研究英書，採縻其意義，分別門類，摹写其□音[23]，輯成此書，名曰華英通語。雖所音或有不能以相肖，然有英字可考，亦不難于所学，是在人之霊与不霊耳。士君子如有精于英人字語者，希為詳加補訂，則音韻益諧，庶不致有厘毫之失[24]，是予之所厚望焉。是為序。

時道光二十九年歳在巳(ママ)酉仲秋下澣　寿階鄭仁山題于竹渓書舎

欠字の部分を推定によって補って解釈すれば、最初の2行の内容の要点は、"英国商人が広東にやって来て貿易を始めたが中国人は英語が分からない、洋務に携わる中国人の中に英語を学ぶ者も現れてきたが総じて［満足に使いこなす］ことができない、そこで英国商人が［私に］英語［の学習書を著すよう勧めた］"ということではないかと思われる。すなわち、「英商□□□□□□英吉利」の欠字を「英商勧予成書講解英吉利」あるいは「英商促予作書繙訳英吉利」のように補って読むということである。この解釈における「英吉利」は国名ではなく言語名すなわち English である。[25]

そして、"［英国商人］が言うには、中英両国間で貿易が始まったが言語が通じなくては情意を伝えられない、あなたは英語を長く学んで習熟しているのだから英語の学習書を著して世に伝えてはどうか、チベット語にもモンゴル語にもポルトガル語[26]にも中国語との対訳の

---

23 ここは欠字を「発音」「語音」「読音」などのように補うことができれば意味上自然であるが、断片的に残っている字画はそのいずれにも満足には合致しない。

24「厘」は「尤」に似た字形で書かれている。当の字形は、Samuel Wells Williams *A Tonic Dictionary of the Chinese Language in the Canton Dialect*『英華分韻撮要』（1856（咸豊6）年）、同 *A Syllabic Dictionary of the Chinese Language*『漢英韻府』（1874（同治13）年）、Ernest John Eitel *A Chinese Dictionary in the Cantonese Dialect*（1877（光緒2）年）などにおいて「厘」の略字、俗字として説明されている。

25「英吉利」は通常英国を表すが、言語名としての使用はほかの資料中にも見出される。例えば、次のような用例がある。

番訳呢(逼)的転英吉利　Translate this into English.

（Samuel W. Bonney *Phrases in the Canton Colloquial Dialect,* 1853（咸豊3）年）

26 この「ポルトガル語」は序文中の「西洋」に対応する。中国語の地名「西洋」が指す地域は時代などによって異なるが、道光本の「各埠名門」に挙げられた「西洋 portuguese」という項目（道45b）に基づいて解釈した。『華英通用雑話』でも国名を挙げた箇所に「西洋 Portugal」という項目がある（雑39a）。Morrison（1817）は、"16世紀にイタリア人カトリック宣教師マテオ・リッチ（Matteo Ricci、利瑪竇）が考案した「西洋」という名称はおそらく欧州全体を指していたが、その後ポルトガルだけを指すのにも使われるようになった"と述べている。

ポルトガル語との対訳というのが具体的に何を指すのかは不詳であるが、おそらく注3で触れたような種類の語彙集のことであろう。ただし、英語についても『紅毛番話』の類の語彙集は出版されていた

語学書がある、英語にも同様のものがあってよいだろう、とのことだった”、“英国商人の話に納得した私は英語で書かれた書籍を研究し、内容を取捨して語句を分類し発音を模写して本書を編み、『華英通語』と題した”と言っているもののように思われる。

以上の解釈が正しければ、道光本は序文の著者である鄭仁山自身によって著されたことになる。『華英通語』咸豊5年本では序文は何紫庭を名乗る人物によって書かれ、作者はその中で子卿の名とともに簡単に紹介されるにとどまる。その5年後に出版された『華英通語』咸豊10年本もそれに似て、序文の著者は拙山人を名乗り、作者は子芳として言及されるだけである。それらの4つの人名が実名であったかどうかも定かではない。しかし、道光本にはそうした事情は当てはまらない。序文の著者が本文の作者であり、鄭仁山はおそらく実在の人物であった。

鄭仁山が研究したと言う「英書」は『華英通用雑話』やデバン、ブリッジマンの広東語入門書を指しているはずである。そして、鄭に英語学習書の執筆を勧めた英国商人はほかならぬトームであったのではないかと筆者はあえて推定する。『華英通用雑話』の著作のあるトームが鄭に英語学習書の作成を勧めたというのは不自然なことのようでもあるが、その助言は『華英通用雑話』執筆の前になされた可能性もあるし、そうでなかったとしても、『華英通用雑話』は北京官話に基づいており（3.2）、トームが鄭に勧めたのは広東語による英語学習書の作成であったと考えれば特に無理はない。

『華英通語』道光本とトームを結び付けて考えることには2つの状況証拠がある。第1に、鄭仁山とトームのあいだに交際があったことは、英国国立公文書館（The National Archives）蔵の香港関係文書F.O. 233/187に収められた同名の人物による嘆願書から知られる。[27] 道光27年12月（1848年1～2月）の書状において、地税を納められず収監されて3か月になると言う鄭仁山なる人物は、英国に協力して緊要かつ危険を伴う公務に何年もたずさわったこと、南京条約後モリソン[28]やトームと連携して職責を果たした後は殺害されかけたことなどを述べて赦免を求めている。嘆願者と道光本の作者の同一性を確認できる証拠はないが、当

ので、ポルトガル語についてはより詳しい語学書が出版されていたということかも知れない。Williams（1837）が紹介している2冊の語彙集についても、ポルトガル語の語彙集の収録語数は約1,200、英語のほうは400語未満だったと言う。

27 F.O. 233/187の表紙には「稟帖」と記されている。‘F.O.’は1782年に設置された英国外務省（Foreign Office）を表す。当の嘆願書を収めた同文書の存在は卜（ぼく）（2011）を通じて知った。

なお、F.O. 233/187は書写による記録である。したがって、その筆跡からは嘆願者の考察に役立つ情報は得られない。

28 嘆願書には「馬礼遜」と記されているが、内田慶市氏のご注意によれば、この「馬礼遜」は時期の点で最初の入華プロテスタント宣教師のRobert Morrison（1782～1834、馬礼遜）ではなく、その息子John Robert Morrison（1814～1843、馬礼遜、馬儒翰）を指すと見られる。Robert Morrisonには息子がもう1人あったが（Martin Crofton Morrison（1826～1870、馬理生））、「馬礼遜」がその第2子を指している可能性はない。第2子は南京条約の時期にはまだ十代であったし、嘆願書にそれが「馬礼遜」の没後に書かれたことを示す記述があるからである。

時英国や英語に深く関わる中国人の範囲に2人の鄭仁山がいたと考えるよりも、道光本の作者が嘆願者であったと考えるほうが自然であろう。[29]

第2に、『華英通語』道光本の序文の内容は『華英通用雑話』の序文のそれに重なるところが多い。トームは序文の前半で次のように述べている。道光本序文における記述に内容上一致ないし類似する箇所に下線を施して示す。

> 余寓粤東多年，頗通漢語，然計漢人暢暁英語者，不過洋務中百十人而已。此外南北各省竟無一人能略知者，未免有意難通，殊覚束手。茲蒙大皇帝准予各処港口通商貿易，仰見聖明天子徳孚四海，溥育群生，遐邇八荒中外如一。咸黎頼此生成，亟当求通言語。将見懋遷日盛，物阜民豊，彼此相交，情投意合，此非言語不通所可得而致也。余故選其貿易中必須之句，訳出漢字英語，纂成書本，使学者有所頭緒，乃能用心，不至諉之無路也。

一致、類似する個々の内容は特殊なものではないが、道光本の序文の趣旨は『華英通用雑話』序文のそれに近く、もし道光本序文に引用された英国商人の助言もトームの発言であったとすれば総体として自然な理解が得られる。

以上の推定が基本的に正しいとすれば、『華英通用雑話』と道光本のあいだに『華英通語』のより古い版が存在したという可能性は考えがたい。『華英通語』の歴史は、鄭仁山がトームの助言を受けて、『華英通用雑話』を基礎とし、内容を補充するという方法によって著した道光本に始まった。[30]

---

29 道光本の序文にある通り、「鄭仁山」は「寿階」を別名とするが、『鄞(ぎん)県志』巻七（1856（咸豊6）年）――「鄞県」は浙江省寧波市鄞州区の母体――には「粤(えつ)商香山県職監鄭寿階」という記述がある。これも同一人物を指している可能性がある。

30 トームが鄭仁山に『華英通語』の執筆を勧めたとする推定を確かなものとするためには、検討と解決を要する問題がある。それは、トームの助言および道光本の執筆の時期に関わる。関連の出来事は次のような時系列を成している。

1842（道光22）年　南京条約締結
1843（道光23）年　『華英通用雑話』出版
1846（道光26）年　トーム死去
1847（道光27）年　鄭仁山収監、デバン広東語入門書出版
1848（道光28）年　鄭仁山釈放（推定）
1849（道光29）年　『華英通語』道光本出版

助言がなされた時期はトームの死去した1846年までのはずである。

また、道光本が単一の期間に執筆されたと仮定すれば、それは出典の1つとして使われたデバンの広東語入門書が出版された1847年以後のはずである。そして、鄭仁山収監の前ではなく、嘆願に基づく釈放の後に執筆が行われたと考えるのが自然である。嘆願書の内容から、収監前の鄭に語学書を著す余裕はなかったと考えられるからである。

ただし、以上の推定が正しければ、助言と執筆のあいだに少なくとも1年程度以上の時間差があったことになる。しかし、序文の書きぶりは助言を受けてすぐに執筆の準備に着手したという印象である。これが重大な食い違いではないのか、それとも、ここで述べた推定が抜本的な訂正を要するのかは今は

5 『華英通語』咸豊 5 年本

東北大学附属図書館蔵の『華英通語』咸豊 5 年本は『華英通語』道光本の形式と一部の内容を継承し、他の数種類の語学書を使って内容を大幅に組み替えたものである。

5.1 咸豊 5 年本の概要

『華英通語』咸豊 5 年本は上下 2 巻に分かれ、それぞれの表紙に「華英通語 巻上」「華英通語 巻下」と記されている。[31] 扉および第 1 葉から第 93 葉まで――巻頭の序文、目録などもそこに含まれる――が巻上、残りの第 94 葉から第 168 葉までが巻下に収められている。

第 5 葉から第 166 葉までの 162 葉が語彙と会話文例から成る本文、第 167 ～ 168 葉の 2 葉が帳票類の見本である。本文は次の 45 の「類」に分けられている。括弧内は目録での表示である。

> 天文類、地理類、職分類、人倫類[32]、国宝類、五金類、玉石類、数目類、時節類、刑法類、紬鍛類、布疋類、首飾類、顔色類、瓜菜類、薬材類、疾病類、茶葉類、通商貨類（通商類）、食物類、酒林類（酒名類）、飛禽類、走獣類、魚蝦類、器用類、房屋類、工匠類（百工類）、菓子類、身体類、草木類、各埠名類（各埠類）、舶隻類、炮製類、字房物類（写字房什物類）、粧扮類、工器類、房物類（房内用物類）、単字類、二字類、三字類、四字類、五字類、六字類、七字類、長句類

帳票類の見本も 46 番目の 1 つの類として扱われ、「単式類」と名付けられている。

語彙と会話文例の境界は截然としていないが、かりに語句の多い「三字類」までとほぼ文例だけから成る「四字類」以下とに二分すれば、前者の項目は筆者の集計では 2,517 件[33]、後者の項目は 224 件である。

語彙、文例の提示は道光本と同様の形式による。欄の配置も道光本のそれを踏襲しており、半葉の欄数は基本的に 4 段× 2 列の 8、ほぼ文例だけで構成されている「四字類」以後では 5 段× 1 列の 5 である。そして、「単字類」では半葉に 5 段× 4 列の 20 の欄が設けられている。ただし、「三字類」までの範囲に「単字類」以外にも例外的に 5 段の欄が設けられている葉があり、そこでは半葉の欄数が 5 段× 2 列の 10 になっている。中国語の書字方向は語彙集

不明である。

31 東北大学蔵本では 2 巻が 1 冊に綴じて製本されている。

32「人倫類」は目録では抜け落ちている。

33 矢放（2004）は収録語彙の総数を“約 3,000”としているが、実際には 2,500 程度である。

では基本的に右から左、文例集と帳票類の見本では左から右である。

咸豊 5 年本は道光本と書名や構成も共通で、内容にも重複がある。現代の社会常識では認められがたい出版物であるが、新たに加えられた内容も多いので、作者の意識としては道光本を参考にして独自の英語学習書を作ったということであったのかも知れない。

5.2　咸豊 5 年本の依拠資料

『華英通語』咸豊 5 年本についても出典として使われた資料を語句と文例に分けて述べる。

5.2.1　語句の出典

『華英通語』咸豊 5 年本の語句約 2,500 件のうち 350 件程度は道光本から取られている。また、少なくとも 1,000 件の語句がブリッジマンの *A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect*（4.2.2）から取られている。咸豊 5 年本での場所を示せば表 4 の通りである。

表 4　『華英通語』咸豊 5 年本の語句の出典

出版年	出典名	咸豊5年本での場所	件数
1841（道光21）	Elijah Coleman Bridgman *A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect*	36a～42b, 49a～63b, 66a～86b, 94a～104b, 113a～118b他	1,000超
1849（道光29）	『華英通語』道光本	13a～18b, 22a～27b, 106b～109a, 137a～138b, 142b～143b, 144b他	約350

すでに見たように、道光本の語彙集は『華英通用雑話』やデバンの *The Beginner's First Book in the Chinese Language (Canton Vernacular)* に依存している（4.2.1）。したがって、理屈のうえでは咸豊 5 年本も道光本ではなくそれらの語学書の語彙を直接利用したという可能性も考えられる。しかし、実際には咸豊 5 年本は道光本によったことが確実である。

例えば、次に示す 16 の語句のほとんどは『華英通用雑話』に由来するが、咸豊 5 年本には『華英通用雑話』ではなく道光本と同じ順序で現れる。そして、道光本で省かれた語句は咸豊 5 年本にもなく、『華英通用雑話』にはなく道光本で追加された語句は咸豊 5 年本にも挙げられている。

> today, this day, tomorrow, day after tomorrow, after two days, yesterday, day before yesterday, two days ago, several days ago, tomorrow night, day after tomorrow night, one moon（ママ）, this month, last month, next month, two months ago
>
> （道 5a ～ 6b、咸 26a ～ 27a）

同様に、次の 22 の語句はデバンの語学書ではなく道光本と同じ順序で咸豊 5 年本に現れる。ただし、咸豊 5 年本では途中に新たに 3 語が挿入されるなどの変更が施されている。

parents, father, mother, brother, old brother, young brother, children, male, female, grandfather, grandmother, sisters, nephew, niece, grandchild, husband, wife, son in law, maternal uncle, widower, widow, friend　（道 39b ～ 40b、咸 13a ～ 14a）

また、デバンが widow、widower の順に挙げている 2 語（9 頁）を道光本は入れ替えており（道 40b）、咸豊 5 年本でもその逆転が引き継がれている（咸 14a）。したがって、咸豊 5 年本は道光本から語句を借用したと考えることができる。

道光本の誤りが咸豊 5 年本にそのまま継承されている語句もある。例えば、道光本には「工 merchanics」という項目がある（道 44b）。これは mechanics の誤りで、直後に挙げられた merchants との綴りの類似に起因する混乱と見られる。また、「放手 hold let go」という奇妙な英語を含む項目もある（道 90a）。これは本来拘束と解放を表す hold と let go の 2 項目であるべきものが編集の不手際によって単一の句のようになったものと考えられる。いずれの語句も咸豊 5 年本にそのまま挙げられている（咸 17a、咸 137b）。もっとも、道光本の誤りがすべて継承されているわけではなく、借用に際して訂正や変更が施されている語句もある。

ブリッジマンの広東語学習書からの語句の借用は少々手間をかけて行われている。それは、多くの場合、学習書に挙げられた文例中から必要な語句を抽出しているということである。例えば、以下の文例からは下線を付した語句が選ばれている。斜体字は学習書における表記の通りである。

1. Tie on an *apron*.
2. Ancient court *bonnets* were made of leather.
3. All the ancient *bonnets* were black.
4. Modern hats are the ancient *bonnets*.
5. Fasten back that *bonnet-ring*.
6. The straps which are tied beneath the chin are called *bonnet-strings*.

（Bridgman 146 頁）

apron, bonnet, hat, bonnetring, strap, bonnetstring　（咸 36a）

斜体の語句だけでなく文中のほかの語句も選ばれていることが着目に値する。また、文例

から単に語句を抜き出すのではなく、文法的な転換を行っている事例も見られる。

86. Bake the *oyster pie* so that the pastry will become light and tender.

（Bridgman 165 頁）

baked oyster pie （咸 112b）

5.2.2　文例の出典

咸豊 5 年本の文例 224 件のうち約 185 件は表 5 に示す 6 件の語学書から取られている。同一の著者による語学書 2 件はまとめて記す。改変を伴う借用か偶然の類似か決めがたい文例が一部にあり、それらをどう扱うかによって件数は多少増減する余地がある。

表 5 『華英通語』咸豊 5 年本の文例の出典

出版年	出典名	咸豊5年本での場所	件数
1815（嘉慶20）	Robert Morrison *A Grammar of the Chinese Language*	153a	2
1826（道光6）	*The English and Chinese Student's Assistant*	147a～149b, 151a	32
1841（道光21）	James Legge *A Lexilogus of the English, Malay, and Chinese Languages*	145a～146b, 154a～156a, 158b～163a, 165b～166b他	85
1849（道光29）	『華英通語』道光本	153a～153b, 158a, 160a～160b, 163b～166a他	40
1853（咸豊3） 1854（咸豊4）	Samuel William Bonney *Phrases in the Canton Colloquial Dialect* Samuel William Bonney *A Vocabulary with Colloquial Phrases of the Canton Dialect*	145a～146b, 151a～152b, 154b, 155b, 160a他	26

『華英通語』道光本から継承された文例は 40 件にとどまる。

最も多くの文例が取られている出典はレッグの *A Lexilogus of the English, Malay, and Chinese Languages*（4.2.2）である。道光本ではデバンが同書から借用した文例が使われていたが、咸豊 5 年本はレッグの著作から直接文例を取っている。そのことは、咸豊 5 年本ではデバンの引いていないレッグの文例が多数使われていることから分かる。

文例の引用件数が以上の 2 書に次いで多い出典は、*The English and Chinese Student's Assistant, Or Colloquial Phrases, Letters &c. in English and Chinese: The Chinese by Shaou Tĭh, A Native Chinese Student, in the Anglo-Chinese College, Malacca*（1826（道光 6）年）である。同書は、'ADVERTISEMENT' と題された序文風の文章によれば、英華書院（4.2.2）の中国人学生に口頭英語を教える目的で編まれた語学書である。書名中に現れる Shaou Tĭh は、英華書院の学生小徳すなわち袁徳輝である。[34] 書名および内容から考えて、本書は英国

34 季・陳（2007）によれば、袁徳輝は、原籍四川巴県の広東南海人で、英華書院に学んだ後北京の理藩院で通訳を務め、その後アヘン禁輸の欽差大臣林則徐の随員として広州に戻った。

人宣教師――当時の校長は David Collie（高大衛）であった――が英語で著した題材に袁徳輝が中国訳を加えるという方法で作られたものと見られる。

サミュエル・W・ボニー（Samuel W. Bonney、邦呢）による語学書２件は、西洋人のための広東語入門書 *Phrases in the Canton Colloquial Dialect, Arranged According to the Number of Chinese Characters in a Phrase, With an English Translation*（1853（咸豊 3）年）と、同 *A Vocabulary with Colloquial Phrases of the Canton Dialect*（1854（咸豊 4）年）である。

西洋人のための中国語文法書であるロバート・モリソン（Robert Morrison、馬礼遜）の *A Grammar of the Chinese Language*『通用漢言之法』（1815（嘉慶 20）年）から取られて文例とされていると見られるのは次の２件である。

> The import and use of the Numerals are similar to the word *sail* when we say “twenty sail of merchantmen.”　（Morrison 37 頁）
>
> 有二十隻貨船 Twenty sail of merchantmen.　（咸 153a）
>
> The ship was lost in a heavy gale of wind or a Typhoon. 船被一陣台風打壊了　（Morrison 42 頁）
>
> 船被大風打去 The ship was lost in a gale of wind.　（咸 153a）

このわずか２例だけのためにモリソンの文法書が使われた理由は不明である。未知の出典を介した間接的な引用であったのかも知れないが、第１の例では単なる名詞句を誤って文例としており、文法の解説中に文例を求めているのも異例である。

5.3　咸豊５年本の特性と評価

『華英通語』咸豊５年本に関する筆者の感想、英語学習書として見たときの評価をまず手短に言えば、咸豊５年本は道光本に比べて紙質がよくなり、字体も整ったものになり、また、文例は大文字で書き始められるようになり、外見上は立派になったが、そして、道光本の使っていなかった複数の語学書からも語句や文例を得て内容の充実を図ってはいるが、実のところ不適切な編集のために英語学習書としての質はかえって低下しているということである。

そう言い得る最大の理由は内容の構成にある。まず、語句の提示順が初学者の学習には適していない。道光本では語彙集が数の表現、時日の表現、身の回りの事物の名称で始まるが、咸豊５年本では天体、気象、地理に関わる語、役職名などで始まる。[35]

35『華英通語』咸豊 10 年本はこの点に関して改善が図られ、「数目類」「時節類」で始まる順序とされている。

文例の提示順も学習効果への配慮を欠いている。そのことを理解するには、咸豊5年本の構成を確かめる必要がある。

すでに述べた通り、咸豊5年本の本文は45の類に分けられている（5.1）。最初の37類は事物の性質に基づく分類であり、残りの類は「単字類」「二字類」～「七字類」「長句類」という中国語表現の字数による分類である。そして、この45の類の中に語句と文例が区別されることなく並べられている。最初の37類と「単字類」にはもっぱら語句が収められているが[36]、「二字類」と「三字類」には語句と文例が入り交じった形で並べられている。つまり、「二字類」「三字類」では、「銀単 Bill」（126a）、「三角様 Triangle」（143a）のような語ないし句、「一対鞋 One pair of shoes」（143a）のような句、「失敬 I beg your pardon」（137a）、「我唔(不)知 I don't know」（143b）のような文が混在している。「四字類」以下ではほとんどの内容が文例である。道光本の「二字門」「三字門」も同様に文例を含むが、道光本はそれ以上無理をせず、4字以上の表現はすべて「長短雑語門」に収めていた。語句については中国語の字数ごとに示すことにはそれなりの意味があり得るとしても、文例を字数の順に提示するという方法で効果的な英語学習書を作れないことは明白である。

『華英通用雑話』では会話文例は対話の流れに従って提示されており、道光本はそれをそのまま利用している。道光本の「長短雑語門」に掲げられた会話文例は次のような基礎的な対話で始まる。

高姓罅 what is your name?――賤姓 my name is
貴処罅 where do you come from?――敝処英倫国 from England
貴庚多少罅 how old are you?――虚度 i am … years old　（道100a～100b）

ところが、咸豊5年本における文例の提示は2字で書かれる中国語文に対応する英文から始まり、以後中国語の字数を逐次増やして文例が掲げられる。しかも、文例の提示は脈絡もない雑多な表現の羅列で始まる。次は「四字類」に掲げられた最初の文例3件である。

呢(這)様易爛 This kind is apt to break
双定(還是)単呢 Is it odd, or even?
佢(他)信兆頭 He believes in omens　（咸145a）

加えて、咸豊5年本では「N字類」の中に字数がNでない文例も含めるという恣意的な

36 ただし、「天文類」の開始部分にブリッジマンの語学書から取られた文が置かれているといった例外はある。

編集まで行われている。次は「五字類」に掲げられた文例である。最初の 2 例では、第 6 字以下は小字で示され、数に含まないものとして扱われている。最後の例ではそのような形ばかりの正当化すら省かれている。

今日請你与我們食点心 Will you take tiffin[37] with us to day?　（咸 147a）
我(不)唔好食牛肉 I am not fond of beef　（咸 147b）
(他)(的)佢嘅誓無中用 His oath is not worth anything　（咸 148a）

語句、文例の字数による分類を「七字類」まで拡張したことで表面的にはより精密、本格的になったが、実のところ無意味な複雑化に過ぎなかった。実際、『華英通語』咸豊 10 年本では「五字類」「六字類」「七字類」の区別は廃止された（後述）。

内容の構成や提示順の問題に加えて、咸豊 5 年本の作者は正統な英語の知識が不足していたと思しく、文法上誤った英語の文例が散見される。それは出典不明の文例ないし出典の文例を改変した文例に集中している。例を示せば次の通りである。これまでの引用においても同様であったが、文末のピリオドの有無は原文に従っている。

(他)佢開漆器舖頭 He has kept Japan ware shop　（咸 152a）
我(会)曉講得些少嗰 I understand it very few.　（咸 160a）
若(不)唔好就唔好買 If they be bad all not buy them[38]　（咸 163b）

『華英通用雑話』も『華英通語』道光本も初学者の独習に使えるものではなかったが（3.3、4.3）、咸豊 5 年本はその点に関してさらに後退したと言わざるを得ない。

巻末の帳票類の見本は道光本には 5 葉あったが、咸豊 5 年本では 2 葉だけと、大幅に減ら

---

37 tiffin は *The Oxford English Dictionary* 第 2 版（1989）によれば、インドとその近隣国で使われ、“A light midday meal; luncheon” を表す名詞である。

このことに関連して補足すれば、矢放（2004）はこの tiffin の語の出現をもって『華英通語』諸本が“インド英語の特色”を持つと論じている。しかし、当の文例はマラッカの英華書院で出版された *The English and Chinese Student's Assistant*（5.2.2）から取られたものである。『華英通語』の内容は版を問わず基本的に他からの借用の寄せ集めであり、そこに見られる英語あるいは中国語の表現の特徴を『華英通語』自体の言語的特徴と見ることには無理がある。例外的に作者の言語知識の反映と見なし得るのは、独自に付け加えられた要素と引用に際して原文が書き換えられた箇所だけである。

38 この英文は次のようにデバンの語学書から道光本を経て咸豊 5 年本に引き継がれたものである。

If they are not good, I'll not buy them　（Devan 107 頁）
if they are not good <u>all</u> not buy them　（道 131a）
If they <u>be</u> bad all not buy them　（咸 163b）

本来の I'll が道光本で all になったのは誤刻の結果であろうが、咸豊 5 年本の作者はその誤った英文をそのまま使い、しかも、are を be に変えて誤りを増やしている。

されている。作者はそのようなもののために数葉を割く必要を認めず、かと言ってそれをなくしてしまう決断も下せず、形だけ残したのであろう。道光本には帳簿に関係した文例があったが（4.2.3）、それらは咸豊 5 年本には引き継がれていない。

6 『華英通語』咸豊 10 年本

大阪大学附属図書館、ハーバード大学燕京図書館蔵の『華英通語』咸豊 10 年本は『華英通語』咸豊 5 年本を改変したものである。

6.1 咸豊 10 年本の概要

『華英通語』咸豊 10 年本の内容は咸豊 5 年本に似ており、一見しただけでは両者のあいだに実質的な違いがあるかどうかも分からないほどである。

第 1 葉から第 176 葉までの 179 葉が語彙と会話文例から成る本文、第 177 ～ 178 葉の 2 葉が帳票類の見本である。版心における葉数の表示と実際の葉数が食い違うのは、版心の葉数表示で同じ数が 2 度使われている場合がある――例えば「七十二」の次は「又七十二」になっている――ことによる。

本文は次の 41 の類に分けられている。括弧内は目録での表示である。

> 数目類、時節類、天文類、地理類、房屋類、器用類、首飾類、房物類、字房物類（写字房什物類）、工器類、職分類（職份類）、人倫類、工匠類（百工類）、国宝類、五金類、玉石類、茶葉類、紬緞類、布疋類（紬緞布疋類[39]）、薬材類、通商貨類（通商類）、疾病類、身体類、刑法類、顔色類、瓜菜類、菓子類、食物類、炮製類、飛禽類、走獣類、魚蝦類、酒林類（酒名類）、草木類[40]、各埠名類（各埠類）、船隻類、単字類、二字類、三字類、四字類、長句類

咸豊 5 年本と同じく、帳票類の見本は 1 つの類「単格式」――目録では「単式類」――として扱われている。

6.2 咸豊 10 年本の編集の方法と内容

『華英通語』咸豊 10 年本における編集は道光本と咸豊 5 年本におけるそれと大きく異なる。

39「紬緞類」と「布疋類」は咸豊 5 年本と同じく本文では分けられているが、目録では 1 つにまとめて「紬緞布疋類」とされている。

40「草木類」は目録では「菓子類」と「食物類」のあいだに置かれている。

序文に“前輩による『華英通語』の遺漏を補い、英語の発音の漢字表記を正した”とあるのは、咸豊10年本の編集の中心が咸豊5年本の内容の改変にあることを意味している。咸豊5年本以外の語学書を用いた増補もなされているが、その範囲は限定的である。

咸豊10年本は追加や変更の箇所以外には咸豊5年本の内容をそのまま利用しており、字体まで一致する。新しい内容は筆跡が異なり、特に英字はやや洗練を欠く字体で書かれていることから、新しい内容は多くの場合容易に見分けることができる。

咸豊10年本における咸豊5年本からの実質的な変更は次の4点に尽きる。

（a）類の再編　一部の類を統廃合し、類を全体に再配置している。
（b）葉の加除　新たに22葉を加え、咸豊5年本にあった5葉を削除している。
（c）発音表記の変更　英語発音の漢字表記を調整している。
（d）個別項目の変更　一部の項目の内容を差し替えたり修正したりしている。

それぞれに手短に説明を加えれば、まず類の統廃合については、咸豊5年本で独立の類とされていた「五字類」「六字類」「七字類」が廃止されて「長句類」に含められたことが最も目立つ。ただし、これは単なる名目上の変更で、廃止された類の内容が「長句類」の一部とされたに過ぎない。ほかに、「粧扮類」も廃止され、そこに置かれていた語句の一部は「首飾類」に移された。これも実質的に類の廃止ではなく統合である。類の再配置は、内容上関連の深い類を同じ場所に置くという目的で行われたものと見られる。例えば、咸豊5年本で遠く離れて配置されていた「疾病類」と「身体類」、「食物類」と「炮製類（加熱調理類）」はそれぞれ隣接する形に変わった。

葉の加除のうち、追加された22葉の内訳は「三字類」までが18葉、「長句類」が4葉である。5葉の削除は「時節類」「通商貨類」「粧扮類」「二字類」の4類で行われている（それぞれ咸28、咸58～59、咸115、咸129）。そのうちで削除の理由を推定しやすいのは「時節類」における十二支の名称を含む葉で、英語の学習に不要と判断されたのであろう。「粧扮類」は上述の通り「首飾類」に吸収された。

英語発音の表記の変更はおそらく本文のすべての葉に及ぶ。

個別的な項目の変更は、内容上不適切な類に配置された語句の置き換えや誤った英語綴りの訂正などである。

帳票類の見本は咸豊5年本のものをそのまま使っている。

6.3　咸豊10年本における増補の依拠資料

咸豊10年本の内容の大部分は咸豊5年本に由来するが、新しく加えられた葉の内容の多

くはほかの語学書に基づいている。語句、文例の増補に用いられたことが確実である出典を合わせて示せば表 6 の通りである。第 153 葉以下が「長句類」で、追加された文例は計 40 件である。

表 6 『華英通語』咸豊 10 年本の増補語句・文例の出典

出版年	出典名	咸豊10年本での場所	件数
1826（道光6）	*The English and Chinese Student's Assistant*	154b, 175a～176b	22
1841（道光21）	Elijah Coleman Bridgman *A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect*	18a～19b	約15
1847（道光27）	Thomas T. Devan *The Beginner's First Book in the Chinese Language (Canton Vernacular)*	41a～41b, 43a～44b, 131a, 145a	約45
1853（咸豊3）	Samuel William Bonney *Phrases in the Canton Colloquial Dialect*	153a～154b	12

追加された文例のうち「長句類」の最後の 2 葉（175a ～ 176b）に掲げられた 20 件はすべて英華書院の *The English and Chinese Student's Assistant*（5.2.2）から取られている――文例中のマラッカが香港に差し替えられるなど一部調整が施されている――。交易に関わるそれらの文例の追加がその必要の判断に基づいて行われたことは確実で、その意味において増補の目的に関する矢放（2007）の推定は基本的に正しいと思われるが、他からの借用に過ぎない文例から直接多くを読み取ることができるわけではない。

6.4 『華英通用雑話』から『華英通語』咸豊 10 年本に至る英語学習書間の継承関係

以上の考察に基づき、先に図 2 として骨格を示した『華英通用雑話』から『華英通語』咸豊 10 年本に至る中国初期英語学習書間の継承関係（2.2）に各段階の編集で利用された語学書の情報を追加すれば図 5 のようになる。

7 『増訂華英通語』

福沢諭吉は 1860（万延 1）年に幕府の軍艦咸臨丸への同乘の許しを得て渡米した際にサンフランシスコの中国商人から入手した『華英通語』を帰国後同年のうちに日本人の英語学習のために仕立て直し、『増訂華英通語』として出版した。中国語と英語の対訳の形式による語彙文例集である『華英通語』に片仮名を用いて注釈を加えるという方法によって『増訂華英通語』は作られた。

図 6 『増訂華英通語』の「眼鏡」

『華英通語』では各項目が中国語表現、英語表現、英語の発音の漢字表記という 3 つの要素で構成されていた。『増訂華英通語』では、図 6 に見るように、日

1843（道光23）年　羅伯聃『華英通用雑話』上巻

↓

1841 Bridgman *A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect*
1847 Devan *The Beginner's First Book in the Chinese Language (Canton Vernacular)*

1849（道光29）年　『華英通語』道光本（大阪大学蔵）

↓

1815 Morrison *A Grammar of the Chinese Language*
1826 *The English and Chinese Student's Assistant*
1841 Bridgman *A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect*
1841 Legge *A Lexilogus of the English, Malay, and Chinese Languages*
1853 Bonney *Phrases in the Canton Colloquial Dialect*
1854 Bonney *A Vocabulary with Colloquial Phrases of the Canton Dialect*

↓

1855（咸豊5）年　『華英通語』咸豊5年本（東北大学蔵）

↓

1826 *The English and Chinese Student's Assistant*
1841 Bridgman *A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect*
1847 Devan *The Beginner's First Book in the Chinese Language (Canton Vernacular)*
1853 Bonney *Phrases in the Canton Colloquial Dialect*

↓

1860（咸豊10）年　『華英通語』咸豊10年本（大阪大学、ハーバード大学蔵）

図５　『華英通用雑話』から『華英通語』咸豊 10 年本に至る英語学習書間の継承関係

本語表現が中国語表現への振り仮名の形で示されるとともに、英語の発音の仮名表記が加えられ、各項目が合わせて５つの要素で構成されている。中国語、日本語の部分と英語の部分を縦の罫によって隔てるなどの配置上の変更は、要素の増加に伴って生じ得る読みにくさを防ぐための工夫であろう。

7.1　『増訂華英通語』とその出版形態、諸本

荒木（1931）によれば、『増訂華英通語』には美濃判の上下２冊本と半紙判の１冊本の２種類がある。そして、前者が“初版”、後者が“再版”という関係にあると言う。２冊本の中にも見返しの色が赤のものと黄のものとがある。

富田（1992）は、「最初、諭吉が中国語の訳語に日本語訳を振り仮名するとき、訳語が未決定のときは、その部分だけ版木を黒く残しておき、訳語がきまるに従って掘（ママ）り起こして行ったので、刷りを重ねるに従って、その版木のまま残した部分が少なくなって行くのが、前後対照するとよくわかって興味が深い」と言う。しかし、筆者が資料現物３点とインターネットで公開されている資料７点の画像で確認した限りでは、そのような刷りによる訳語の有無

の差は一例も見出せなかった。[41] もし富田の記述が事実であり、筆者の確認に見落としがないとすれば、筆者の参照の範囲にない初期の刷りが複数存在するのであろう。また、富田（1958）では「半紙判には更に美濃判本の誤りを訂正した跡も見られる」とも述べられているが、これについては筆者は確認を行っていない。ともあれ、ここでの調査には相対的に新しいとされる1冊本を用いる。

7.2 『増訂華英通語』の原本

福沢諭吉の『増訂華英通語』は『華英通語』咸豊5年本に基づいて作られた。そう断定できるのは、それ以外の可能性が考えられないほどに両者の内容が近似しているからである。かりに『増訂華英通語』の原本が『華英通語』咸豊5年本ではなかったとしても、それは咸豊5年本と完全に、ないし、ほとんど同一の内容のもの――別の出版者による再刊版、誤字の訂正の有無に関してのみ異なる刷りなど――であったはずである。しかし、そのような異版の存在は知られていない。

福沢が『増訂華英通語』の作成に用いた『華英通語』の版の問題について、内田（2001）は、「その出版年からして、恐らくはこれ【＝咸豊5年本（引用者注）】が原書か、あるいはそれに最も近いものと言うことが出来るであろう」と述べている。また、矢放（2015）は、「『福沢購入本』と『狩野本』【＝咸豊5年本（同）】は極めて近い関係にあることが判明するが、詳細にみると『福沢購入本』即『狩野本』とはならない」と述べている。内田は断定を避け、矢放はむしろ否定しているが、以下に述べる分析から、『増訂華英通語』の原本が『華英通語』咸豊5年本であったことは確実である。[42]

7.3 『増訂華英通語』における“増訂”

『増訂華英通語』の書名に言う“増訂”の内実は従来よく分かっていなかった。そして、事実に反する記述も行われてきた。

『華英通語』咸豊5年本と見比べれば、『増訂華英通語』では各項目に日本語表現と英語の発音の仮名表記が加えられていることのほか、巻頭に福沢による凡例が付け加えられていることや、半葉の欄の数が増やされていることなどは一目瞭然である。また、咸豊5年本では語彙集の開始部分に置かれた「天文類」において、その最初の2つの欄を使って「The

---

41 参照した資料現物は京都大学大学院文学研究科図書館蔵の2冊本と1冊本および関西大学図書館蔵の1冊本である。資料画像は「早稲田大学古典籍総合データベース」および「慶応義塾大学メディアセンターデジタルコレクション」で公開されているものを利用した。

42 ほかに平井（2002）も『増訂華英通語』編集の背景を論じているが、矢放（2015）も指摘するように平井は『華英通語』咸豊5年本の存在を把握せずもっぱら咸豊10年本との対比と想像に頼って考察しているために、事実からかけ離れた論に終わっている。

body of the heavens is apparently spherical like a globe &c, Its breadth is immeasurable. 天体渾円若球其広莫測也」（咸 5a）[43]と書かれているが、『増訂華英通語』ではそれが省かれているといったこともすぐに分かる。

しかし、そうしたことを除くと、福沢が『増訂華英通語』において行った増訂は同書の内容に立ち入って調べてみなければ分からない。ここではそうした見地からの分析の結果を述べる。

半葉における欄数について補足すれば、『華英通語』では道光本から咸豊 10 年本に至るまで基本的に 4 段× 2 列、8 つの欄が設けられていたが、『増訂華英通語』では欄が増やされ、8 段× 2 列の 16 となっている。[44] これにより、咸豊 5 年本は本文――語彙集と会話文例集――が 162 葉であったのが、『増訂華英通語』では 97 葉に減っている。

7.3.1　増補

福沢による“増訂”――正確に言えば、編集――には、増補、削除、訂正という 3 種類の要素がある。

まず、『増訂華英通語』における増補の要素については、各項目に日本語表現と英語の発音の仮名表記が加えられているだけである。『華英通語』咸豊 5 年本になかった語句や文例の追加は一切行われていない。

内田（2001）、矢放（2015）ともに『華英通語』咸豊 5 年本と『増訂華英通語』とでは収録語彙に「出入り」があるとし、矢放は加えてそれが「『綢緞類[45]』『顔色類』『茶葉類』【中略（引用者）】など 16 類に及び、特に『房室類』については『福沢本』は 16 語彙多く収録している」と述べている。しかし、実際には福沢による語の補充はなされていない。先に述べた通り、語句と語句を収めた欄は 1 対 1 の関係になく、咸豊 5 年本で 1 つの欄に入れて示された 2 つの語句を福沢はしばしば 2 つの欄に分けて記した（2.4）。内田、矢放はおそらく欄の数によって比較したのであろう。

語彙の類別や語句、文例の提示順も咸豊 5 年本の通りである。矢放（2004）は語彙分類の項目の立て方に若干の異同があると述べているが、実際にはそのような変更はなされていない。矢放は本文ではなく巻頭の目録に基づいて判断を下したのであろう。咸豊 5 年本には目録に類の記載漏れがあり、それを福沢が不正確に補っているために（後述）、目録だけ見れば語彙の分類が一致していないように見える。しかし、本文における語彙分類に関しては両

---

43 当該の英文はブリッジマンの *A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect*（4.2.2）を出典とする。
44 図 6 に見る通り、語句の各項目は縦罫によって 2 つの欄に区切られているので、半葉の欄数は実際には本文に書いた数の 2 倍、すなわち、8 段× 4 列の 32 である。しかし、比較の便宜上項目内の縦罫は無視し、『華英通語』の場合と同じく語句や文例の 1 項目を収めた領域を 1 つの欄と見なすことにする。
45 正しくは「紬緞類」。

書間に不一致の要素はない。

増補について補足すれば、日本語表現はすべての項目に加えられているわけではない。例えば、「牛奶餅 Cheese（チース）」（31b）、「会燕窩（燕の巣のスープ）Stewed birdnests（スチュード ボイルドネスツ）」（32a）は日本語表現を欠いている。このような事例は西洋や中国に固有の事物を表す名詞に多い。『増訂華英通語』巻頭の凡例において福沢は、“語のうちで和訳を示していないものは、日本に名前のないものか、類似の名はあっても穏当かどうか未詳ゆえにみだりに訳を下すことを控えるものである”と断っている。

英語の発音の仮名表記はほとんどの項目に加えられているが、例外が3件だけある。その1つは「看銀者（カネアラタメカタ） Shroff」（6b）という項目である。shroff は英語の辞書によれば“インドの両替屋、中国の貨幣鑑定人”を表す名詞である。当該の語が福沢の使った辞書に載っていなかったことから発音を後で確かめるつもりでそのままになってしまったのかも知れない。ほかの2件には後に別の文脈で触れる。

7.3.2　削除

削除の要素のうち、まず『華英通語』咸豊5年本の「三字類」までの語彙集に掲げられた語句――ただし、少数の文例を含む――について言えば、約2,500の項目（5.1）のうち32件が『増訂華英通語』では削除されている。

それらの省略は3つの類に大別して理解することができる。その第1は、一部の語彙の類の開始部分に掲げられた見出しや解説の削除である。先に触れた「天文類」における英中対訳の解説（咸5a）（7.3）、「地理類」の「地乃円 The earth is round」（咸7a）、「人倫類」の「五倫 The five relations of mankind, &c.」（咸13a）、「顔色類」の「五色 Five colors」（咸40a）、「飛禽類」の「鶏類 Fowl」（咸66a）などの計7件がこれに該当する。[46]

第2は、重複の解消のための削除である。例えば、咸豊5年本に2度ずつ掲げられている「艱難 Difficult」（咸133b、咸139a）や「做茶 Make tea」（咸137a、咸138a）は中国語、英語とも一致しており、いずれも2度目の出現が省かれている。もっとも、福沢が偶然気付いたと見られる重複が解消されているだけで、咸豊5年本には重複と見なし得る語句が約80組あるが――その数には当然「燕 Swallow」（咸68a）と「呑 Swallow」（咸121a）、「書信 Letter」（咸114b）と「字 Letter」（咸121a）のような同音異義語や多義語の組は含めていない――、『増訂華英通語』で処置されているのは6件だけである。

---

46 本文に挙げた5件のほか、「地理類」の「地乃円 The earth is round」に続く2つの欄を使って書かれた「The surface of the earth consists of land and water. Only a little more than one quarter is land 其面分水与土為土者得全面四份之一有奇其余即皆為水」と、「顔色類」の「五色 Five colors」の直前の欄における「顔色之目指不勝屈倘有不識其名者遂将五色名加以」という解説2件も削除されている。

残る 19 件が第 3 の類であるが、これにはさまざまなものがある。例えば、「茶葉類」には「大珠 Imperial」と「珠蘭 Imperial」という 2 項目があるが（ともに咸 50a）、後者は省かれている。おそらく実体が不明で英語も一致することから、一方で十分と福沢が判断したのであろう。「紬鍛類」の「四川綢 Sz'ch'ün pongee」（咸 32b）は補助記号混じりの英語の綴りの判読が困難である。扱いにくいという理由でこの語は省かれたのかも知れない。[47] しかし、省略の動機を推定できないものも多い。例えば、「食物類」の「芝麻油（ゴマ油）Seasamun[48] oil」（咸 63b）、「菓子類（果実類）」の「楊桃 Carambola」（咸 99b）、「二字類」の「投売 Auction」（咸 138b）が削除された理由は不明である。それらの語が日本人の英語学習に役に立ちそうにないという説明は成り立たない。咸豊 5 年本の語彙集には――『華英通語』の他の版の場合と同じく――そのような語句はきわめて多いからである。省かれた語句の一部は単なる書写漏れであった可能性もある。

「四字類」以下に掲げられた文例に関しては、224 件（5.1）のうち 4 件が削除されている。まず、削除の理由がはっきりしているのは、

你重(還)有呢(這)様(的)嘅貨嗎 Have you more of this article?　（咸 164a、咸 166b）

の文例で、咸豊 5 年本で重複して 2 度挙げられていることから、2 度目の出現箇所で削除されている。

残る 3 件は以下の文例である。

箇(那)処打架 There is fighting there　（咸 146b）
你在辺(哪裡)処得銭做 Where do you get for doing this　（咸 150a）
啵，唔係 Poop noncense(ママ)　（咸 153b）

これらの削除の理由ははっきりしない。第 2 の文例については、英文やその中国語文との対応が解釈しにくいことから省かれたのかも知れない。第 3 の文例は、内容上学習書に掲げる必要がないと福沢が判断したか、咸豊 5 年本が道光本から引用する際に綴りに誤りが生じた noncense の“語”が分からなかったために省いたのであろう。最初の例の削除の理由はさらに不透明である。当の文例 3 件が属する「四字類」「六字類」ともに類の末尾に空白の

---

47 この項目は咸豊 5 年本においてブリッジマンの *A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect*（4.2.2）から取られた語句の 1 つである。活字で印刷された同書を見れば、本文に引用した通りの綴りであることが容易に確認できる。
48 正しくは Sesamum。sesamum は sesame の異形。

欄があるので、配置上の都合による削除ではない。

7.3.3　訂正

『増訂華英通語』においては『華英通語』咸豊５年本に含まれるさまざまな誤りその他が訂正されている。上で見た語句や文例の重複の解消も訂正の一種と言えるが、ほかにも以下のような種類の訂正が施されている。

最も目を引きやすいのは、大数の項目における表現の訂正である。すなわち、咸豊５年本は道光本までと異なり、100,000、1,000,000、10,000,000 の各数をそれぞれ「一億」「一兆」「京」という中国語によって表示している（咸 23b ～ 24a）のであるが、福沢は日本語表現を「ジフマン」「ヒヤクマン」「センマン」とすることによってそれを訂正している（増 11a）。[49] ただし、福沢は原本の中国語を尊重したと思しくそのまま残したことから、「一億（ジフマン）」「一兆（ヒヤクマン）」「京（センマン）」という不可解な表記となった。

図７　『増訂華英通語』の「一億（ジフマン）」

各学習書における大数の項目の内容を比較しやすい形にまとめると表７のようになる。[50] 道光本までは各数が「十万」「（一）百万」「（一）千万」と記されていたのが、咸豊５年本で書き換えられている。表では中国語表現に変更の生じた箇所をゴシック体で示している。

表７　大数の項目の比較

	『華英通用雑話』		『華英通語』道光本		『華英通語』咸豊5年本		『増訂華英通語』	
1,000	一千	one thousand	一千	one thousand	一千	one thousand	二千（セン）	one thousand
10,000	一万	ten thousand	一万	ten thousand	一万	ten thousands	一万（マン）	ten thousand
100,000	十万	one hundred thousand; or one lac	十万	one hundred thousand or one lac	**一億**	one hundred thousands	一億（ジフマン）	one hundred thousands
1,000,000	一百万	one million; or ten lacs	百万	one million or ten lacs	**一兆**	one million or ten lacs	一兆（ヒヤクマン）	one million or ten lacs
10,000,000	一千万	ten millions; or one hundred lacs	千万	ten millions or one hundred lacs	**京**	ten millions one hundred lacs	京（センマン）	ten millions one hundred lacs
100,000,000	一万万	one hundred millions; or one thousand lacs	万万	one hundred millions				

また、咸豊５年本において語彙は「天文類」「地理類」「職分類」「人倫類」「国宝類」に始まる多数の類に分けて掲げられているが、巻頭の目録では第４の「人倫類」が脱落している

---

49 古代中国の命数法においては「億」「兆」「京」の数詞によって 10^5、10^6、10^7 を表すこともあったことが知られている。19 世紀の中国にはその慣習が残っていたと見られ、当時の英語の辞書や学習書には例えば ‘one hundred thousand’ を「十万」と訳すものと「一億」と訳すものとがある。日本も当時同様の状況にあったが、福沢は咸豊５年本の表現を訂正すべきものと判断したのであろう。

50 表中に現れる lac は 10 万を表すインド英語の表現である。

(5.1)。福沢はそのことに気付き、『増訂華英通語』の目録に「人倫類」を追加している。ただし、追加する位置を誤ったために、「天文類」「地理類」「人倫類」「職分類」「国宝類」という、本文とは食い違う順序になっている。[51]

事例が多いのは、咸豊5年本における英語綴りの誤り（ないし非標準的な綴り）の訂正である。例えば、「差役 Polisman」（咸15a）は Policeman（増6a）、「船写字 Pursur」（咸16a）は Purser（増7a）、「利器匠 Cutter」（咸98b）は Cutler（増52a）、「安字板 Gally」（咸117b）は Galley（増63b）、「鬆 Lossen」（咸121a）は Loosen（増67b）にそれぞれ訂正されている。確認できた訂正は30件弱である。『華英通語』咸豊5年本、『増訂華英通語』ともに手書きの筆記体によって記されているために、紛らわしい字をどう解釈するかによってその数は違ってくる。また、訂正漏れも少なくなく、それについてはすぐ下で述べる。

「回音 A reply answer」（咸133b）という項目の奇妙な英語表現は道光本（道93b）から咸豊5年本にそのまま引き継がれたものであるが、『増訂華英通語』では「A reply, answer」（増77a）のように2語に分けて示されている。

7.4　誤りの残存と新たな誤りの発生

『増訂華英通語』では福沢の気付いた『華英通語』咸豊5年本における英語の綴りの誤りが訂正されてはいるが、訂正されず残っているものもある。訂正漏れは20件以上あり、数例を示せば次の通りである。正しい語形を［ ］内に示す。[52]

職分名目（ヤクメイ） Official（オフヒシール） tittles（チットルス）［titles］　(3b)
商人（アキンド） Merchunt（マルチュヌト）［merchant］　(6a)
大餐房（キヤクマ） Dinning（ヂヌニン） room（ルーム）［dining］　(48a)
厠坑（カワヤ） Crosset（クロスト） room（ルーム）［closet］　(48b)
火漆（シーリン） Ceiling（シーリン） wax（ウヲクス）［sealing］　(61b)
跌傷了（コケテケガスル） To（ツー） be（ビ） hurted（ハルテド） by（バイ） a（エ） fall（フヲール）［hurt］　(82a)

また、『華英通語』咸豊5年本にはなかった誤りが新たに発生している項目も40件以上ある。誤りの発生が誤りの訂正（30件弱）を数において上回る。

---

51 類名に関してはほかに、咸豊5年本では目録、本文とも「房屋類」となっているのが『増訂華英通語』の本文では「房室類」になっている。ただし、目録での類名は変更されておらず、「房室類」は単なる誤写の可能性もある。

52 福沢は英語の発音をより正確に示す目的で仮名の一部を小字にしている。例えば、「祖父 Grandfather」の発音は「グレヌᵈフハーザル」と表記されている。しかし、ルビの文脈でこれを再現することはむずかしいので、ルビにおいては通常の仮名によって引用する。

サムライ オフヒシールス
仕 Officiels［officials］ (7a)
ラットビット フハヲル
老鼠鶏 Ratbit fowl［rabbit］ (32a)
クチ モ ヌ ス
口 Month［mouth］ (54b)
ハイゾウ レ ン グ ス
肺 Langs［lungs］ (55b)
ワタクシハ コノテガタヲ ニセデハ アルマイカト キヅカフ アイ エ ム エフレード ザット ズ キ ビ ル イズ フヲールジド
我 怕 佢 張 銀 単 係 仮 I am aflaid that the bill is forged.［afraid］ (85b)
アノヒトハ コンニチ サ ガ サ レ ル ヒ ス トライル テークス プレース ツ ー デ ー
佢今日要被人審嘲 His trail taks place to day.［trial, takes］ (95a)

次に示す項目は『華英通語』道光本および咸豊5年本でmechanicsが誤ってmerchanicsと記されていたものであるが（5.2.1）、誤りがさらに増えている。

シヨクニン マ ル チ ャ ニ ー ス
工 Merchanies［mechanics］ (7b)

7.5 『増訂華英通語』の評価ほか

『華英通語』咸豊5年本は、英語初学者の学習書として見れば、『華英通用雑話』や『華英通語』道光本よりいっそう後退したものであった（5.3）。この評価は、咸豊5年本に日本語による注釈を加えただけの『増訂華英通語』にも当然そのまま当てはまる。教師のもとで学ばない限り、同書をいくら学習したところで初歩的な英文も組み立てられるようにならなかったはずである。刷りを重ねて売られたと言う同書が購入者によってどう使われたかに関心を覚えるが、それを確かめるすべはない。

『増訂華英通語』における編集に関して考察に値する問題の1つは、増補がどのようにしてなされたのかということである。同書は英語を学び始めて日の浅い福沢が米国で『華英通語』を入手してからわずか数か月のうちに編集、出版したものである。付加された日本語表現がどのような方法で準備されたのかという問題もあるが、福沢はどのようにして英語の発音を知り、それを仮名表記したのであろうか。

『増訂華英通語』における英語の発音の表記には相矛盾する2つの面がある。それは、基礎的な語の発音を誤っている事例も多いが（7.4）、その一方で、発音の表記が慎重に行われたことを窺わせる事例も見出されるということである。例えば、「炮製類」の「火食（ショクモツ） Victual」（60b）の発音を「ヴキッツル」と表記している。単に英語の綴りに基づいて発音を表記していれば（現代の表記によれば）「ビクチャル」ないし「ヴィクチュアル」のようになったはずであるが、福沢の表記では黙字のcが正しく省かれている。また、「看銀者（カネアラタメカタ） Shroff」（6b）に発音の表記が添えられていないことはすでに述べたが（7.3.1）、ほかに「房屋（房室）類」の「牛房 Bardana or major」と「天台 Varanah」（ともに47b）にも発音の表記が――そして、日本語表現の表示も――ない。前者は、本来「牛蒡 Bardana major」

として「瓜菜類」に挙げられるべきものが、咸豊5年本で中国語、英語ともに誤って記され、不適切な語類に収められたものである。[53] 後者は道光本の verandah が咸豊5年本で varanah と誤写されたもので、読めなくて当然である。しかし、いずれの語も綴りに頼ってとりあえず読むという方法ならば発音を表記することもできたはずである。

以上のような二面性はおそらく、福沢が発音の表記を自力で行った項目と他人の教示ないし英語辞典に基づいて行った項目とがあったことの反映であろう。

8　羅伯聃訳『正音撮要』すなわち *The Chinese Speaker*

これ以後は、ここで取り上げた英語学習書に関わる付随的な問題3件について述べる。

トームは『華英通用雑話』上巻刊行の3年後の1846（道光26）年に高静亭纂輯、羅伯聃訳述『正音撮要』上巻と題する語学書を出版している。ここでは、両書の関係と、後者の『正音撮要』上巻に関する考察を述べる。

8.1　『華英通用雑話』と *The Chinese Speaker* の関係

高静亭纂輯、羅伯聃訳述『正音撮要』上巻の英語での書名は *The Chinese Speaker, Or Extracts from Works Written in the Mandarin Language, As Spoken at Peking, Compiled for the Use of Students,* Part I である。『正音撮要』という書名による言及では高静亭による原著と紛れやすいのみならず、『正音撮要』と呼ぶことは後に述べる通り内容上不正確でもあるので、以後英語書名の *The Chinese Speaker* によって言及する。『正音撮要』の書名はトームが熟慮に基づいて決めたものではなかったと筆者は推定する。

『華英通語』系列の英語学習書の起点となった羅伯聃『華英通用雑話』上巻、すなわち、Robert Thom *Chinese and English Vocabulary,* Part First については、その下巻、Part Second の存在は知られていない。実際、Williams（1849）は“第2部が印刷されることはなかった”と述べている。

内田（1997）は、『華英通用雑話』上巻の凡例の内容に触れて、「文章の作り方等については『下巻』で詳しく述べるというのであるが、果たして『下巻』は出版されたのであろうか？」と問いを提起し、結論として、「実際は『下巻』は出版されず、その代わりに『Chinese Speaker』を作ったとするのが妥当なようにも思われる」と述べている。

しかし、『華英通用雑話』と *The Chinese Speaker* はおそらくそのような関係にはない。

---

53 ちなみに、『華英通語』咸豊10年本の作者はこの項目に問題があることに気付き、しかし、本来の形に訂正するのではなく、中国語、英語とも入れ替えて「房屋類」に適した「牛欄 Cow-house」（16b）という項目に変えている。

それは端的に言えば、『華英通用雑話』は中国人の英語学習、*The Chinese Speaker* は西洋人の中国語学習のために編まれた語学書だと見られるからである。『華英通用雑話』の中国語による序には、“英語のできる中国人が少ないので、貿易に必須の句を‘漢字英語’に訳して本書を成した”ことが述べられ、凡例では英語習熟のためには英国人と日常的に話すことを勧め、英文の作り方は下巻で詳しく解説すると予告している（3.3）。それに対し、*The Chinese Speaker* 巻頭の ‘TO THE READER’ と題された英文は、学習者に対して“教養のある北京出身者を見つけて中国語文を読んでもらう”こと、“四声がむずかしくても教師の発音を模倣する”ことを勧め、“北京語の学習には北京の教師が最良である”と述べている。また、両書の本文について見ても、『華英通用雑話』は語句や文例の提示において、英語の発音を漢字で示している。例えば、one、two、three の発音を「温」「都」「地児衣（三字合念）」と表示している（雑 1a）。しかし、「一」「二」「三」の発音は示されていない。これに対し、*The Chinese Speaker* では、中国語文の発音がローマ字で示されている。例えば、「近来外頭有什麼新聞呢」という文については “What news is there outside of late?” という英語の訳文とともに “kin-lai wai-tow yew shim-mo sin-wen ne?” として中国語の発音が表示されている（37 頁）。そして、英語訳の読みは示されていない。[54] *The Chinese Speaker* という書名自体もまた中国語の学習書であることを示していると言える。

したがって、『華英通用雑話』と *The Chinese Speaker* は少なくとも第一義的にはそれぞれ中国人のための英語学習書、西洋人のための中国語学習書であり、互いに独立した出版物であったと考えられる。『華英通用雑話』がまだ完結していなかったにもかかわらず、目的を異にする語学書である *The Chinese Speaker* が出版されたのは、おそらく当時中国在住の西洋人が増えてきて、その中国語学習の支援をトームが優先すべき課題と考えたということであろう。

8.2 *The Chinese Speaker* の内容

The Chinese Speaker は英語学習書ではないにせよ、『華英通用雑話』と同じ作者による語学書であり、両書には内容上重なる部分もあるので、*The Chinese Speaker* について確認できたことを簡単に述べる。

The Chinese Speaker について考える際にまず注意すべきは、同書はトームの死去の年に未完成の状態で出版されたものだということである。巻頭の ‘TO THE READER’ には、死去の約 1 か月前でありトームの 39 回目の誕生日でもある “10th August, 1846” という日付が

54「近来外頭有什麼新聞呢」の文は高静亭『正音撮要』から取られたものである（巻一中 22b）。同じ文は『華英通用雑話』でも使われ、そこでは “What news is there lately outside?” という英語訳に対して「滑的（合） 姈士（合） 衣士（合） 嘀児（ㄦ） 咧的（合）厘 嘔（合）的顯（合）的」という形で発音が示されている（雑 31b）。

記されている。そしてそこには、“本来これよりもはるかに規模の大きい書物の刊行を考えていた、資料も豊富に準備してあり多彩な内容にするつもりであった、しかし、重篤な病状が続き療養のために帰国許可を求めざるを得なくなった、そこで、すでに印刷されている部分だけを序文も解説もない状態で出版することにした、もし健康を回復することができればこの仕事を再開して Part II を出版したい”と記されている。

そうした記述から知られるように、また、英語の書名に含まれる *Extracts from Works Written in the Mandarin Language* という表現が示す通り、本来 *The Chinese Speaker* は単なる高静亭『正音撮要』の対訳本として準備されたものではなかった。上で *The Chinese Speaker* を『正音撮要』と呼ぶのは内容上不正確であると述べたのはそのことによる。トームは、『正音撮要』を含む多種類の中国の書籍を用いて西洋人のための中国語学習書を編むつもりであったが、‘TO THE READER’ に記された事情のためにやむなく、すでに印刷されていた内容だけを用いて *The Chinese Speaker* の Part I としたのであった。

The Chinese Speaker は、高静亭『正音撮要』――その巻一中「正音読本」と巻一下「問答」――、『紅楼夢』第六回、『家宝全集』の「和夫順妻」の 3 種類の内容より成る。それぞれの原文とそのローマ字による発音表記および英語訳とが対の形で示されている。量的には、200 頁余りの *The Chinese Speaker* のうち約 6 割が『正音撮要』であり、合わせて残りの 4 割を占める『紅楼夢』と『家宝全集』の比率は約 2 対 1 である。『紅楼夢』と『家宝全集』については目次に記載がなく、‘TO THE READER’ の末尾に ‘ADDENDA’、すなわち、追加として記されているにとどまる。

高静亭『正音撮要』の内容は概ね原文の通りに利用されているが、*The Chinese Speaker* の「問答」（原本巻一下）においては、「鬧玩意児」と「看変戯法児的」の 2 つの対話が最後に付け加えられ、他方、「鬧小旦」（原本巻一下 7b）、「誡嫖」（8a）、「警嫖」（8a）、「女子看狗」（10a）の 4 つの対話が道徳に反するものとして省かれていることを黄（2013）が指摘している。また、「正音読本」（原本巻一中）においても各所で卑俗な表現を含むくだりが削除されている。「正音読本」の終結部を構成する「見面常談」は『華英通用雑話』に会話文例として収められていたものであるが（3.2）、*The Chinese Speaker* にも再び収められている。

『家宝全集』に関しては、石成金撰写『重刻添補伝家宝俚言新本』（1739（乾隆 4）年）と対比してみたところによれば、やはり不適切と判断されたと見られる字句が省かれているほか、誤字や脱字の多さが目立つ。トームが内容を十分確認することのできない状態で印刷に回されたということであろう。

『紅楼夢』については原文との対照による確認を省く。

9 『華英通語』道光本における書き込み

大阪大学蔵の『華英通語』道光本では語彙集を中心とする多くの項目に日本語が書き込まれている。例えば、図8は「眼鏡」の項目である（9b）。語の意味と英語の発音が「メガネ」「スペキテキロス」と書き込まれている。そして、道光本が素朴な字体で書かれていることから書き込みとの区別が判然とせず、福沢諭吉の『増訂華英通語』をも思わせる状態になっている。語の意味がほとんど片仮名で記されていることも『増訂華英通語』との類似の印象を強めている。[55]

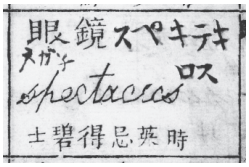

図8 『華英通語』道光本の「眼鏡」

この日本語の書き込みは明らかに本書を使って英語を学んだ日本人によるものである。ここではこの書き込みの観察から考え得ることについて述べる。

なお、学習者はしばしばまず鉛筆で書き込んだうえで墨筆によって清書しているのであるが、その清書の段階で誤写が生じたことを疑わせる箇所もある。しかし、清書が鉛筆による下書きをなぞる形で行われている場合には下書きの内容を確認することができず、そのために書き込みの情報価値が一部減じていることが惜しまれる。また、この書き込みはその筆跡から考えて井上翠によるものではない（4.1.3）。

9.1 『華英通語』道光本による英語学習

『華英通語』道光本とその書き込みからは日本人の早期の英語学習の一端を窺うことができる。

まず、この学習書はいつ日本人の英語学習に使われたのであろうか。本書が大阪外国語学校に図書として登録されたのは1923（大正12）年であるが（4.1.1）、日本では明治維新前後から多くの英語学習書が続々と出版されており、このような古く、内容も不十分で、しかも、日本語による説明を含まない学習書が長く使い続けられたとは考えにくい。とすれば、本書を使って日本人が英語を学んだのは19世紀中葉、すなわち、本書の出版された1849（嘉永2）年から『増訂華英通語』の出版された1860（万延1）年ごろにかけての期間であったと考えるのが自然である。大阪大学蔵の道光本はその刊行から間もない時期に日本にもたらされたことになる。

本書を用いた英語学習がどのように行われたのかということについて言えば、まず、学習

---

55 図8が『増訂華英通語』の項目のようにも見えるということは、別の角度から考えれば、福沢が『華英通語』から『増訂華英通語』を作り出すときに行った作業はこの道光本の学習者が行ったこと――さらに言えば、おそらく西洋の言語を学ぶ当時の日本人がしばしば行っていたこと――と基本的に同じであったということであろう。

者が教師に就いて学んだことは確実である。英語の綴りから乖離した発音が少なからぬ項目に書き込まれているからである。もし学習者の独学であれば、「十一 eleven」「十二 twelve」（1b）、「外 outside」（70b）の発音が「レブン」「トワル」「アツサイ」と記されることはなかったはずである。また、「鶏仔 chicken」（12b）、「孫 grandchild」（40a）には「チキンス」「グランチウレン」という発音が記され、「褲 trousers」（8a）、「大碟 large plate」（11a）、「賊仔 thief」（42a）には「ペンス」「ビキ ブレイテ」「ステイル」と記されている――それぞれ pants、big plate、steal であろう――。さらに、「鋏 シエイルス セサンス」（55b）[56]、「(ママ)隣家 ネキスト ハウス」（95a）のように学習書にない語句が書き込まれてもいる。[57]

学生は1人だったのか、複数だったのか。これについては、タイミングを逸したと見られる書き込みがあることから考えて、少なくとも学生が教師との差し向かいで指導を受けたのではないと見られる。語彙集の例えば世界の国名、身体部位の名称を列挙した箇所で、「意他即羅馬 italy 又曰 rome」（45b）の項目に「アイツレン」、「眼晴 eyeball」（56a）の項目に「アイラシ」という発音が記されている――それぞれ Iceland、eyelash であろう――。学校か塾のような場で複数の学生が同時に学んでいた可能性を示唆している。

教師は英語の母語話者だったのか、それとも、英語を外国語として学んだ人物だったのか。この問いに関して書き込みの与える印象は両面的である。すなわち、判読しにくい字体で書かれた一般性の低い語句が正しく読まれ、「薬杵 stone pestte(ママ)」（61b）のように誤って記されたものも訂正して「ストン ペストル」（stone pestle、石製の乳棒）と読まれていることなどからすれば、相当の英語の知識を有する人物であったことは確実で、その意味において母語話者であった可能性は十分にある。しかし、そのような事例の一方で、英語の知識の不足を思わせる読みが書き込まれている語句もある。例えば、「芝時戟[58]（チーズケーキ）cheeseeake(ママ)」（16b）、「小腸気（ヘルニア）hernid(ママ)」（59a）にはそれぞれ「チゼイキ」「ヘミデ」という読みが記されている。教師が複数いた、あるいは、一部の書き込みは学習者が独自に行ったとすればそうした矛盾にも説明が付くが、限られた証拠に基づいてこれ以上のことを論じることはむずかしい。[59]

56「シエイルス」「セサンス」はそれぞれ shears、scissors であろう。

57 原理上は、英語発音の仮名表記は道光本の漢字表記を読み下したものであるという解釈の可能性もある。しかし、その解釈は現実にはあり得ない。本文に挙げた発音表記の事例からもそのことは明らかであるが、ほかにも、一部の漢字に対応する音が仮名表記にはない、漢字表記にない音が仮名表記にある、同一の漢字が状況によって異なる仮名表記に対応している、漢字表記に誤字があっても仮名表記は正しく行われているなど、漢字表記と仮名表記のあいだには不対応の要素が非常に多い。

58「芝時戟」は cheesecake の音訳。

59 本文では道光本を使った英語学習が日本で行われたという前提に基づいて述べたが、学習の地が中国であった可能性も完全には排除できない。沖田（1953）によれば、幕末から日清戦争ころにかけて英語学習のために上海に渡った日本人はおびただしく、明治初年までに「上海で英語を修めた者は直接英米人についたものと思われる」と言う。ただし、道光本への書き込みに中国での学習を示唆する要素は見

9.2　英語子音 /θ/ の発音——TH Fronting

『華英通語』道光本における書き込みのうち、語句の日本語訳の中にも興味を引くものがある。例えば、「玻璃罈 glass bottle」（10b）には「ギヤマントクリ」、「千里鏡 telescope」（29b）には「トウ(ママ)メガネ」と、現代語では廃れた語によって語句の意味が書き留められている。しかし、こうしたものは個別的であり、事例も多くはない。

それに対して、英語の発音の仮名による表記には一般性があり、分析に値する。ここでは書き込まれた発音の表記を用いて 2 つの問題を考察する。

発音の書き込みに関して目を引く事実の 1 つは、英語の語句に含まれる子音 /θ/ の発音が「フ」の仮名を使って記されていることがあることである。それには音韻的に見て次の 2 つの場合がある。

（a）音節冒頭かつ母音エ（によって日本語化される母音）の直前
thick フエケ（68a）、thin フエン（68a）、think フエンキ（73b）、thank フエンカ（83b）、many thanks メリ フエキス（87b）

（b）音節末
teeth チイフ（56a）、north ノウフ（69b）、north east ノウフ イヽスト（81b）、north west ノウフ ウエイスト（82a）

いずれにも該当しない場合においては、「three ツレイ」（1a）、「throat スロウト」（56b）、そして、「thirteen タルテ」（1b）、「thunder タンデル」（53b）のように当該箇所の発音がタ行かサ行の仮名によって記されている。また、（b）に該当しても、「table cloth テブル クロウス」（11a）、「mouth マウス」（56b）のように「ス」と書かれているものもある。「truth ツロウテ」（72b）はおそらく「ツロウフ」か「ツロウス」の誤記であろう。

こうした /θ/ の「フ」による表記は、教師がいわゆる ‘TH Fronting’（Wells（1982a））の特徴を有する——すなわち、/θ/、/ð/ がそれぞれ［f］、［v］として発音される——英語方言を身に付けた人物であった可能性を不確実にではあるが示唆している。ただし、TH Fronting はロンドン英語の特徴として知られるものの、英国内にとどまらず世界各地の英語に見出される現象であるために（Wells（1982b））、残念ながら教師像を限定するための有力な材料にはならない。[60]

られない。

[60] /θ/ の「フ」による表記が TH fronting の反映であると言い切ることができないのは、教師による [θ] の発音が学習者に「フ」のように聞こえたに過ぎない可能性もあるからである。ちなみに、『華英通語』の本文においても、音節末の /θ/ が「teeth 的夫」（道 56a）、「north 囉乎」（道 69b）、「earth 啞扶」（咸豊 10 年本 10a）のように広東語での発音が [f] で始まる漢字によって表記された例が見られる。鄺(こう)其照『字

ほかに rotten の発音が「ロン」（66b）と記されているのは、'T Glottaling'（Wells（1982a））——/t/ の声門閉鎖音化——の例のようにも見える。ただし、これについては類似の書き込みの例がほとんどなく——「outside アツサイ」（70b）は同類である可能性がある——、例えば button、butter の発音は「バタン」（9b）、「バタ」（14b）のように記されている。

9.3　母音挿入による開音節化

英語の発音の仮名表記に基づいて考察し得るもう 1 つの現象は、英語の語句に含まれる閉音節の開音節化である。

現代日本語では外来語の開音節化は通常ウかオの母音の挿入によるが、周知の通り、古くは「インキ」や「テキスト」のようにイが挿入されることがあった。『華英通語』道光本の書き込みには、そのようなものを含む、現代では見られない——少なくとも生産的でない——型の開音節化の事例が多数見出され、当時の日本人による英語音声の知覚の一端を垣間見ることができる。

当時にあっても、母音挿入の基本はウとオである。そこで、それら以外の母音の挿入の事例を当の母音および前後文脈中の母音の種類に基づいて分類してみると以下のようになる。ただし、音節末の /ʃ/、/tʃ/、/dʒ/ は後に決まってイが付加されているので——例えば、「wash ウワシ」（70a）、「watch ワチ」（84a）、「sponge スポンジ」（26a）——、ここでは省く。また、英語の曖昧母音を日本語の母音に置き換える際の母音の選択も挿入母音の選択に共通する面があると考えられるので、その種の事例の一部も併せて扱う。類例の多いものは一部だけを示す。

（a）イの挿入

（i）イの後（あいだに撥音、促音が介在するものを含む）

potato pudding ポテイト プリキ（16a）、ink インキ（27a）、cheek チツキ（55b）、medicine メリシン（59b）、eat イヽチ（69b）、big ビキ（74b）

（ii）エの後（あいだにウ段音、撥音、促音が介在するものを含む）

six セキス（1a）、stick ステッキ（9b）、egg エンギ（18b）、pickles ベキロウス（19a）、silk セルキ（34b）、eating house エテンキ ハウス（48b）、market マアケチ（49a）、limbs レンミ（58a）、sickness セキネス（59a）、speak スベキ（70a）、send センリ（72a）、mix メツキス（74a）、mend メンリ（81b）

（iii）エイの後

典集成』の改訂版（1875（光緒 1）年）に添えられた語彙集『雑字撮要』にも「month 蚊付」（11 頁）などの例がある。

pig フヱイ$\dot{ギ}$（13b）、baked ベイ$\dot{キ}$（15a）、beef steaks ビイフ ステイ$\dot{キ}$（15b）、cake ケイ$\dot{キ}$（19a）、grapes グレイ$\dot{ビ}$ス（23a）、slave スレイ$\dot{ビ}$（42b）、deck レイ$\dot{キ}$（47b）、leg レイ$\dot{ギ}$（57b）、headache ヘデイ$\dot{キ}$（59b）、mistake ミツテイ$\dot{キ}$（72b）、beg ベイ$\dot{ギ}$（73b）

（iv）アイの後

borax ボウライ$\dot{キ}$ス（60a）、strike スツライ$\dot{キ}$（70a）

（v）前舌母音に先行する位置

stockings $\dot{シ}$トキン（8b）、mu(ママ)squite ム$\dot{シ}$ケイダ（65b）、clean $\dot{キ}$レン（71b）

（vi）その他

road ロウ$\dot{ジ}$（55a）

（b）エの挿入

（i）イの後（あいだに促音が介在するものを含む）

sweet スイ$\dot{テ}$（68a）、midst ミツ$\dot{テ}$（84b）、is イ丶$\dot{ゼ}$（101b）、difficult デビ$\dot{ケ}$ル（101b）、it イ$\dot{テ}$（103a）

（ii）エの後（あいだにウ段音、撥音、促音が介在するものを含む）

rabbit ラベ$\dot{テ}$（13a）、melon メ$\dot{レ}$ン（20b）、carpet カペ$\dot{テ}$（28a）、gimlet ゲンムレ$\dot{テ}$（52a）、red レン$\dot{デ}$（62a）、chocolate チヨクレ$\dot{テ}$（63b）、elephant エレフン$\dot{テ}$（65a）、snake スネヱ$\dot{ケ}$（65b）、left レフ$\dot{テ}$（66b）、take テヱ$\dot{ケ}$（71b）、get ゲヱ$\dot{テ}$（72a）、kick ケツ$\dot{ケ}$（74b）、it ヱ$\dot{テ}$（76b）

（iii）エイの後

late レイ$\dot{テ}$（7b）、plate ブレイ$\dot{テ}$（11a）、lamp shade ランフ シヱイ$\dot{デ}$（29a）、chief(ママ)mate チイフ メイ$\dot{テ}$（44a）、a lake ヱレイ$\dot{ケ}$（55a）、straight スツレイ$\dot{テ}$（68a）、wet ウヱイ$\dot{テ}$（68a）、debt デイ$\dot{テ}$（73a）、receipt ルセイ$\dot{テ}$（78a）、forget フルゲイ$\dot{テ}$（80a）

（iv）アイの後（あいだにウ段音、撥音が介在するものを含む）

table mat テブル マイ$\dot{テ}$（11b）、pilot ハイ$\dot{レ}$テ（42a）、pirate パイル$\dot{テ}$（42a）、back バイ$\dot{ケ}$（56b）、sweat スワイ$\dot{テ}$（57b）、right ライ$\dot{テ}$（66b）、light ライ$\dot{テ}$（67a）、like ライ$\dot{ケ}$（79b）、divide リバイ$\dot{テ}$（79b）、find フワイン$\dot{テ}$（80a）、ride ライ$\dot{デ}$（82b）、outside アウツサイ$\dot{デ}$（84b）

（v）前舌母音に先行する位置

today $\dot{テ}$デイ（4b）、study ス$\dot{テ}$デイ（51b）

（vi）その他

tart トアル$\dot{テ}$（15b）、toast トヲス$\dot{テ}$（17b）、clerk クロウ$\dot{ケ}$（44a）、holland

ホロンデ（45a）、fort フヲルテ（45a）、arrowroot アロウロウテ（59b）、bird ブウルテ（65a）、hot ホヲテ（66a）、round ラウンテ（66b）、shut シヤテ（71a）、dirty ドテ（71b）、add アヽデ（72a）、hurt ホルテ（73b）、glad グラアテ（79a）

（c）アの挿入

（i）アの後（あいだにイ段音、ウ段音、促音が介在するものを含む）

button hole バタンホヲル（9b）、black tea ブラカ テイ（30a）、musk マスカ（60b）、black ブライカ（62a）、lilac ラヱラツカ（63a）、fat フワアタ（66a）、bad バアダ（71b）、embark インバウルカ（80a）

（ii）その他

fork フヲカ（11a）、pork fat ホヲク フヱウタ（14b）、rattan work ライテ ウヱイカ（31a）、musquite（ママ）ムシケイダ（65b）、thank フヱンカ（83b）

このように整理してまず気付くのは、大多数が英語の子音 /t/、/d/、/k/、/g/ の開音節化の例であることである。それ以外の子音に関わるものは、(a)の「medicine メリシン」「limbs レンミ」「grapes グレイビス」「slave スレイビ」「stockings シトキン」「musquite（ママ）ムシケイダ」、(b) の「is イヽゼ」「melon メレン」ぐらいである。[61] /t/、/d/、/k/、/g/――加えて、上の分類で省いた /ʃ/、/tʃ/、/dʒ/――以外の子音の場合は、前舌母音が先行していても通常「sheep シーフ」(13b)、「tables テブロ」(28b)、「male メヱル」(39b)、「niece ネイス」(40a)、「live レブ」(72a) のようにウやオが挿入されている。

また、前舌母音に続く文脈において、/k/、/g/ には母音イ、/t/、/d/ には母音エが加えられる強い傾向があることも分かる。「spectacles スペキテキロス」(9b) の例はその傾向を 1 語のうちに具現している。そして、4 つの子音のうち /t/、/d/ は前舌母音のない環境でもしばしばテ、デになる（(b) の (vi)）という意味において、挿入母音がイに決まっている /ʃ/、/tʃ/、/dʒ/ ほどではないにせよ、エの選択の傾向が強いと言える。

その後英語やローマ字の知識が社会に普及し、英語の発音の受け止め方も綴りに支配されるようになったが、道光本の書き込みは日本語話者の、知識や慣習に縛られない純粋な音声知覚を反映しているものと考えられる。

なお、英語の発音を仮名で記した 19 世紀の学習書や辞書は少なくない。しかし、『増訂華英通語』にしても、より早い例えば本木正栄（まさひで）（庄左衛門）『諳厄利亜（アンゲリア）語林大成』(1814（文化 11）年）にしても、現実の発音からかけ離れた表記が多く、各著者がしばしば綴りに頼って発音を推測して記していることが明白である。そのような資料はここで行ったような調査に

61 ほかに (a) の「potato pudding ポテイト プリキ」「eating house エテンキ ハウス」はカ行音になっているが、原語の /ŋ/ に関わっている。

は使えない。道光本の書き込みは実際の発音の聴取に基づいて行われたものとして固有の価値を有している。

10 『増訂華英通語』における［v］音の仮名表記

『増訂華英通語』において、英語の子音 /v/ を含む river は「リーヴル」(2b)、cover は「コヴハル」(40a)、heavy は「ヘヴキ」(65b)、leave は「リーヴ」(15b)、vest は「ヴェスト」(20a)、ivory は「アイヴョリ」(28b) という仮名表記によって発音が示されている。

福沢諭吉は『増訂華英通語』巻頭の凡例で“ウ、ワに濁点を加えたものはブ、バとウ、ワの中間の音である”と説明し、時事新報社編『福沢全集』第 1 巻（時事新報社、1898 年）の緒言においては“V の発音を原音に近付けるためにウ、ワの仮名に濁点を付けてヴ、ヷと記してみたのは当時思い付いた新案だ”と述べている。これらの記述を受けて、福沢が「ヴ」という表記の考案者であるとする見方は広く語り継がれているが、その際「ヷ」の存在や「ヴ」の用法の現代との違いが顧みられることはない。[62] また、「ヴ」という表記は既成の事実として無批判に扱われるが、私見によればそれもまた不適切なことである。評価の観点から、その考案が日本語にとって何を意味したかということも考えてみる必要がある。

10.1 福沢による「ヴ」と「ヷ」の用法

福沢は［v］音の表記に「ヴ」「ヷ」を使ったとしか述べていないが、両者を無差別に使っているわけではない。ここではまず福沢が『増訂華英通語』において英語の発音の表記に「ヴ」と「ヷ」をどのように使っているかを確かめる。調査は「三字類」までの範囲を対象とし、会話文例の多い「四字類」以下は除外する。

「三字類」までの英語の語句中に /v/ は 162 回出現する。重複して現れる少数の語の多くは 2、3 回の出現であるが、前置詞の of だけは 33 回と頻度が高い。しかし、重複を処理する基準を定めるのが容易ではないのと、また、of は以下で見る通り発音の表記が例外的でほかの語の統計と混じり合うことはないので、ここではすべての語を出現ごとに数える。

発音表記の加えられていない「天台 Varanah」(47b)（7.5）を別とすれば、/v/ に関わる発音 161 件のほとんどは「ヴ」（または濁点のない「ウ」）か「ヴ」のいずれかによって表記されている。その様子を母音の種類ごとに分けて示せば表 8 の通りである。

---

62 楳垣（1943）に短い言及があるのが筆者の把握する唯一の例外である。なお、楳垣は当該箇所で「いまひとつ注目すべきこと」として、『増訂華英通語』では子音 /f/ に関わる「フハ」「フキ」「フェ」「フョ」、/w/ に関わる「ウハ」「ウキ」「ウェ」「ウョ」の表記が見られることに触れ、「現在の表記法の先駆をなすものと見ることができる」と述べている。しかし、それらの表記は『増訂華英通語』に特有のものではなく、先行する出版物中に容易に見出すことができる。

表 8　『増訂華英通語』における「ヴ」「ヴ」の使用状況

「ヴ」を用いた現代の表記	ヴァ	ヴィ	ヴ	ヴェ	ヴォ
『増訂華英通語』での表記	ワ゛ 23 ワ゛ァ 1 ヴハ 5 ヴヮ 1 ウヮ 1	ヴキ 30	ヴ 33 ウ 2 フ 36	ヴェ 22 ウェ 1	ヴヲ 6
	計 31	計 30	計 71	計 23	計 6

「ウ」を「ヴ」の誤記ないし異表記と見てよいとすれば、イ、エ、オの各段においては例外なく「ヴキ」「ヴェ」「ヴヲ」という表記が使われていることになる。

ウ段は「ヴ」（「ウ」）のほか「フ」でも表記されており、表に示した延べ度数では「フ」による表記が全体の約半分を占めている。しかし、実際には「フ」による表記の対象はもっぱら of と five に限られており、その 2 語を除けば例外なく「ヴ」が使われている。33 回現れる of の発音は一貫して「ヲフ」として示されている。five が関わる 3 例は、「five フハイフ」（10a）、「five modes of punishment フハイフ ムードス ヲフ ポニシメヌト」（14a）、「five senses フイフ（ママ） セヌシス」（55b）である。基礎語の of と five の発音についてはほかの語とは異なる受け止め方がされていたものと考えられる。念のために言えば、これは語末の /v/ が一般にそのように扱われているということではない。have、give、believe などの語の発音の表記には「ヴ」が使われている。このことの関連において興味を引くのは、of と five における発音表記の例外的な扱いは『増訂華英通語』以外の資料中にも見出されるということである。一例を挙げれば、吉田賢輔纂輯『西洋旅案内 外篇』（1869（明治 2）年）に掲げられた会話文例において /v/ を含む語の発音表記には「ヴヮ」「ヴ」「ヴェ」「ヴォ」が使われているが――イ段になる発音を含む語の例は偶然ない――、of と five だけはやはり「フ」を使って発音が示されている。当時「オフ」「ファイフ」という 2 つの基礎語は英語に熟達していない日本人にもその形で知られていたのかも知れない。[63]

やや複雑な様相を呈しているア段においては、多く「ヴ」という表記が使われている。そして、「ヴ」が使われているのはア段だけである。しかし、「ヴ」以外にも、「ヴァ」や「ヴ」を使った「ヴハ」「ヴヮ」という表記によっている場合もあり、福沢がア段に関しては表記の選択に迷っていたことが分かる。[64] 現代においては /v/ に関わる発音はバ行の仮名か「ヴ」

---

63 もっとも、『増訂華英通語』の「七字類」に掲げられた文例では five の発音が「フハイヴ」と記されているので（91b）、five の /v/ には例外なく「フ」が使われていると言えるわけでもない。

64 楳垣（1943）は、『増訂華英通語』に「リーヴル（river）のやうな例もあるから、最初は『ヴ』が考案されついで『ヴ』が案出されたもの」であると述べている。しかし、そのような推論の妥当性は疑わしい。しかも、もし楳垣の言う通りだったとすれば、福沢はまず [v] 音に関わるア段の表記（「ヴ」「ヴァ」）だけを考案し、その後イ段以下の表記を考案したということになる。

を含む表記を用いて示され、「ヴ」は使われない。そして、今日用いられる「ヴァ」という表記が『増訂華英通語』には見出されないことも着目に値する。

同書以後における /v/ に関わる発音の仮名表記の変遷はここでの関心の範囲を超えるが、粗い調査の限りでは、「ヴァ」については吉田庸徳（ようとく）『袖珍英和節用集』（1871（明治 4）年）に最も早い使用例――「vice ヴァイス」（56a）、「vineyard ヴァインイャルド」（57a）など――が見出された。

10.2　福沢考案説に対する異論について

福沢が［v］音の「ヴ」による表記を考案したとする通説に対しては杉本（1977, 1980, 1982）が繰り返し異を唱えている。

まず杉本（1977）では、蘭学者柳河春三（しゅんさん）『洋学指針 英学部』（1867（慶応 3）年）における英語の発音の仮名表記を紹介したくだりで、「〈v〉について〈ヴェー〉と〈ヴ〉の表記が見える。〈ヴ〉は一般に福沢諭吉発案といわれているが、かならずしもそうでない証拠の一つである点注意されたい。」と述べている。しかし、同書は『増訂華英通語』より出版が 7 年も遅く、福沢考案説を否定する証拠能力を持たない。

杉本（1980）は、「諭吉が自分でその旨を記述しているから、確かであるように誤解されているようだ」とし、今度は自説を補強するために柳河の英語力や学者としての資質を持ち出し、「〈ヴ〉の表記は諭吉以外に、彼よりよく英語のできた柳河春三のものにみえる」、「春三は諭吉と比べれば英語において数段の実力もあり、学者としても優秀だった」などと力説している。その一方で、「諭吉のものは自叙伝『福翁自伝』にもフィクションがある」と、福沢に対する評価は否定的である。

杉本（1980）の段階までは柳川が福沢より先に「ヴ」を使ったという判断の直接的な言明は慎重に控えられていたが、杉本（1982）に収められた杉本（1981）への補注では、「おそらく春三の方が先に用いていると思う」という表現によって意見が表明されている。

しかし、一般的な理解を否定してまでそのような主張を行うためには、しかるべき証拠の提示が必要である。福沢と柳河の“英語力の差”について言えば、柳河による発音表記の水準は杉本の論述の与える印象からは程遠い。例えば次のような『洋学指針 英学部』における発音表記は、同書が『増訂華英通語』の 7 年後の出版であるにもかかわらず、あからさまに後退している。柳河は英語の基礎語の発音すら知らず、綴りと想像に頼って読みを記したことが明白である。

	『増訂華英通語』（1860 年）	『洋学指針 英学部』（1867 年）
my	マイ（72b）	ミー（4b）

law	ロー（14b）	ラウ（5b）
sun	サヌ[65]（1a）	シュン（12a）
thumb	スヨム（55a）	デュム（13a）
three	スリー（10a）	ズリー（13b）
seven	セーヴヌ（10a）	シーヴン（13b）
fifty	フキフチ（10b）	フワイフティ（14a）
one thousand	ウヨヌ サウゼヌド（11a）	オン ゾウセンド（14a）

音声学的に考えて、[v] 音の「ヴ」「ヴ」による表記は恣意的なものではない。[v] は [w] に、[w] は [u] に調音上、そしてそれゆえに、聴覚上も近接しており、[v] を [b] から区別して表すのにワ行の仮名を利用して「ヴ」「ヰ゛」「ヱ゛」「ヲ゛」としたり、「ウ」を利用して「ヴァ」「ヴィ」「ヴ」「ヴェ」「ヴォ」などとしたりするのは音声上自然なことである。したがって、[v] 音に関わるそうした仮名表記の考案が高度な英語力を要するという考えは疑わしい。また、そのようなことであるから、当の表記が複数の人間によって独立に考案されたということもあり得る。いずれにせよ、事実を明らかにするには、予断や特定の人物を考案者として顕彰したいといった願望にとらわれず、事実に基づいて考察することが必要である。

当時の英語の学習書や辞書における表記の状況の粗い確認の限りでは、現に福沢が『増訂華英通語』編集時に [v] 音の「ヴ」「ヴ」による表記を考案し、それが刷りを重ねた同書を通じて社会に受け入れられるとともに一部の表記が調整され、最終的に現在の形――すなわち、「ヴァ」「ヴィ」「ヴ」「ヴェ」「ヴォ」――に落着したもののように思われる。

10.3 「ヴ」表記の再評価

日本語に不安定な慣習として定着した [v] 音の「ヴ」による表記は一般に既成事実として無批判、肯定的に扱われる。しかし、我々は日本語の表記にとって「ヴ」がどのような存在であるかを考えなければならない。

日本語の音韻体系上区別することのできない外国語の発音を書き分けるという徒労を試みるのであれば、書き分けなければならない音の区別はほかにも無数にある。英語に限っても、

---

65 英語の n、ng で綴られる音節末ないし子音前の子音を今ではそれぞれ「ン」「ング」として日本語化するが、福沢はそれらの子音を「ヌ」と「ン」で書き分けている。「sun サヌ」や「one thousand ウヨヌ サウゼヌド」の表記はその方針に基づく。音節末の ng は「king キン」(3b) のように表記されている。
ただし、正確に言えば、いずれの方式も英語の発音の区別を示そうとするものではあるが、突き詰めれば 2 通りの綴りの転写に過ぎない。例えば monkey は /ŋ/ を含むが、綴りが n であるために、現代では「ン」とされ、福沢においては「ヌ」で表されている（13b、36b）。

/l/ と /r/、/s/ と /θ/、/ou/ と /ɔ:/ と枚挙にいとまがない。/b/ と /v/ だけを書き分けたところでそれは独善的な自己満足でしかない。それも、一貫して書き分けるのならまだしも、我々は現在「バイオリン」でよいのか「ヴァイオリン」と書いたほうが体裁がよいのかと迷い、その一方で、「バレーボール」「ビニール」「ドライブ」「エレベーター」「100 ボルト」など多くの日常的な語はかまわず――と言うよりも、それらの原語が［v］の音を含むことを意識もせず――バ行の仮名で書く。日本語の表記にそうした不便と不一貫、無節操をもたらしたのは無用の「ヴ」の表記を考案した福沢であり、それを模倣して普及に荷担した語学書や辞書の著者、編者たちである。

『増訂華英通語』における「ヴ」「ヴ」の使用は、「river リーヴル」（2b）、「seven セーヴヌ」（10a）、「love ローヴ」（67a）、「give ギヴ」（87a）などの例に見るように、現代における「ヴ」の気紛れな用法と違って徹底したものであった。英語の発音を示すための記法だったのであるから、当然のことである。そのような「ヴ」を、限られた範囲の外来語の表記に半ば趣味的に使うものに変えてしまったのは後の日本人である。しかし、それは「ヴ」がそもそも通常の日本語表記としては無理のあるものであったということにほかならず、混乱の根源的な責任が福沢にあることには変わりがない。先に触れた『福沢全集』における記述は、福沢が一般の日本語における「ヴ」の普及を考案者として誇らしく思っていたことを示している。

私見によれば、「ヴ」の表記の考案――すなわち、日本語の音韻体系に自立的に存在しない音声に対する専用の表記の割り当ての試み――は功績であるどころか、日本語の表記の合理性と安定性を損なう有害、迷惑な所業であった。もし福沢が英語の音声にさらに注意深ければ /b/ と /v/ 以外にも多くの書き分けを考案していたであろうが、そのようなことが行われなかったのがせめてもの救いであった。

大正末年の臨時国語調査会（1926）は「日常一般に用いられて居る日本化した外国語の写し方が現在はなはだ区区になつて居てまことに不便であるから、委員会においてこれを統一することにした」とし、「ヴ」や「ヴ」による表記についてはバ行の仮名に統一するとしている。ところが、その適切至極な判断が継承されず、昭和、平成の国語施策がむしろ「ヴ」を容認し――無原則の同音異表記を放置し――、表記の混乱を助長する方向を選んでいるのは理解に苦しむところである。そうした新しい判断を支えている動機として筆者に想像することができるのは上述の自己満足と慣習への盲従、迎合だけである。[66]

---

[66]「ヴ」による表記をバ行の仮名に統一すると問題の生じる語が 1 つだけある。すなわち、英字 v の名称「ヴィー」を「ビー」に書き換えると b との区別が完全に失われる。通常の語と異なり、独自の意味を持たないために文脈的な判別が機能しないからである。しかし、これについては「ブイ」という名称が定着しているので、それによればよい。ちなみに、この「ブイ」は「ヴ゛」（「ヴィ」）という表記の誤読の産物とも想像され――『横文字早学』（著者不明、1866（慶応 2）年）のように現に「ヴイ」と記している語学書もある――、そうであれば福沢の間接的な功績と言えなくもない。もっとも、それは

11　おわりに

羅伯聃『華英通用雑話』から『華英通語』咸豊 10 年本に至る中国初期英語学習書の展開の過程を追い、福沢諭吉訳編『増訂華英通語』の成立背景を探るとともに、それらの学習書に関わる問題に考察を加えた。

論述はしばしば各学習書の細かい評価にも及んだ。それは過去の資料の一般的な扱い方とは異なるかも知れない。しかし、古い学習書と言えどもそれを単なる語句や文例の記録、今さら批判的な目で見る意味のない過去の遺物として受け止めたのでは、そこから読み取れることも限られる。系譜を成す一連の学習書を比較すると、それぞれの作者が先行する学習書をいかに改変しようとしたかが見えてくる。そして、改変は新版の作者による先行学習書の評価に基づいて行われたはずである。私見によれば、系譜を成す学習書の特性と相互関係の満足な理解のためには、それらを出版、流通当時の視点から本来の生きた学習書として受け止め、評価することが有効であり必要でもある。

文献

荒木伊兵衛（1931）『日本英語学書志』（創元社）

井上翠（1950）『松濤自述』（大阪外国語大学中国研究会）

内田慶市（1997）「清国英語事始」『関西大学中国文学会紀要』第 18 号

内田慶市（2001）『近代における東西言語文化接触の研究』（関西大学出版部）

内田慶市（2002）「近代日中欧言語文化接触に関わる一つの現象―19 世紀中国における英語学習―」藤善真澄編『福建と日本』（関西大学出版部）

内田慶市・沈国威編（2009）『言語接触とピジン―19 世紀の東アジア―』（白帝社）

楳垣実（1943）『日本外来語の研究』（青年通信社出版部）

大阪外国語学校編（1924）『大阪外国語学校一覧 自大正十二年 至大正十三年』（大阪外国語学校）

沖田一（1953）「英学に及ぼした上海の影響」『西京大学学術報告 人文』第 3 号

杉本つとむ（1977）『江戸時代蘭語学の成立とその展開Ⅱ―蘭学者による蘭語の学習とその研究―』（早稲田大学出版部）

杉本つとむ（1980）『外国語と日本語』（桜楓社）

杉本つとむ（1981）『江戸時代蘭語学の成立とその展開Ⅳ―蘭語研究における人的要素に関する研究―』

福沢の「ヴ」表記考案の意図に齟齬する偶然的な派生物に過ぎない。

なお、上述の事情から、福沢による「ヴ」表記考案の目的が英字の名称の区別にあったと推論できるわけではない。v に b と異なる名称を与えるだけでよければ、専用の仮名を用意するまでもなく、当時のほかの書き手と同じく「ウィ」「ウェ」「ウイー」「フヘー」「ヰ」などと書くこともできたからである。

（早稲田大学出版部）

杉本つとむ（1982）『江戸時代蘭語学の成立とその展開Ⅴ―翻訳の方法に関する研究、資料・総索引―』（早稲田大学出版部）

田野村忠温（2017）「近現代語『可能』の成立―日中両語間の双方向的影響―」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第 57 巻

田野村忠温（2018）「言語名『英語』の確立」『東アジア文化交渉研究』第 11 号（関西大学大学院東アジア文化研究科）

富田正文（1958）「後記」慶応義塾編『福沢諭吉全集』第 1 巻（岩波書店）

富田正文（1992）『考証福沢諭吉 上』（岩波書店）

平井一弘（2002）「福沢諭吉『増訂華英通語』とハーバード版『華英通語』」『大妻比較文化』3（大妻女子大学比較文化学部）

矢放昭文（2004）「『華英通語』の価値について」『東方』第 285 号

矢放昭文（2015）「福沢諭吉と『増訂華英通語』」『京都産業大学日本文化研究所紀要』第 20 号

臨時国語調査会（1926）「当字の廃案と外国語の写し方」『官報』第 4113 号（大正 15 年 5 月 12 日）（内閣印刷局）

和田博徳（1962）「福沢先生の処女出版『増訂華英通語』の原本」『三色旗』第 169 号（慶応義塾大学通信教育部）

卜永堅（2011）「香港早期文書―英國國家擋案館藏 F.O.233/186-187 號擋案釋文―」『田野與文獻』第 65 期（香港科技大學華南研究中心）

黄薇（2013）「重考《正音撮要》的版本问题」『古籍整理研究学刊』2013 年第 4 期（东北师范大学古籍整理研究所）

季压西・陈伟民（2007）『中国近代通事』（学苑出版社）

矢放昭文（2007）「《华英通语》反映的一百五十年前粤语面貌」张洪年・张双庆・陈雄根主编『第十届国际粤方言研讨会论文集』（中国社会科学出版社）

王为民（2006）「《正音撮要》作者里籍与版本考论」『古籍整理研究学刊』2006 年第 6 期（东北师范大学古籍整理研究所）

Bridgman, Elijah Coleman（1847）‘The Chinese Speaker, or extracts from works written in the mandarin language, as spoken at Peking: compiled for the use of students, by Robert Thom, Esq. H. M. consul, Ningpo: Part I. Ningpo, Presbyterian Mission Press, 1846: With a biographical notice of Mr. Thom’. *The Chinese Repository,* Vol. 16, No. 5.

Downing, Charles Toogood（1838）*The Fan-Qui（番鬼）in China in 1836-7,* Vol. 2, London: Henry Colburn, Publisher.

Hunter, William C.（1882）*The ‘Fan Kwae（番鬼）’ at Canton Before Treaty Days 1825-1844.* London: Kegan

Paul, Trench, & Co.［扉における著者名の表示は An Old Resident。著者名は跋文に W. C. H. とのみ記されている。］

Lindsay, Hugh Hamilton and Karl Friedrich August Gützlaff（1833）*Report of Proceedings on a Voyage to the Northern Ports of China, in the Ship Lord Amherst.* London: B. Fellowes.

Möllendorff, Paul Georg von（1876）*Manual of Chinese Bibliography, Being a List of Works and Essays Relating to China.* Shanghai: Kelly & Walsh.

Morrison, Robert（1817）*A View of China, for Philological Purposes; Containing a Sketch of Chinese Chronology, Geography, Government, Religion and Customs.* London: Black, Parbury, and Allen, Booksellers to the Honorable East India Company.

Wells, John C.（1982a）*Accents of English 2: The British Isles.* Cambridge: Cambridge University Press.

Wells, John C.（1982b）*Accents of English 3: Beyond the British Isles*. Cambridge: Cambridge University Press.

Williams, Samuel Wells（1836）'Jargon spoken at Canton: how it originated and has grown into use; mode in which the Chinese learn English; examples of the language in common use between foreigners and Chinese'. *The Chinese Repository,* Vol. 4, No. 9.

Williams, Samuel Wells（1837）'Gaoumun（澳門番語雜字全套）fan yu tsā tsze tseuen taou, or A complete collection of the miscellaneous words used in the foreign language of Macao. 2. Hungmaou（紅毛買売通用）mae mae tung yung kwei hwa（鬼話）, or those words of the devilish language of the red-bristled people commonly used in buying and selling'. *The Chinese Repository,* Vol. 6, No. 6.［記事標題冒頭にある第1の書名の「全」に相当する部分がしばしば tesuen として引用されるが、その2音節表記は *The Chinese Repository* の誤植である。新しいと見られる刷りでは tseuen に訂正されている。また、第2の書名の前にある '2.' に呼応する '1.' が第1の書名の前に欠けているものと見られる。］

Williams, Samuel Wells（1849）'List of works upon China, principally in the English and French languages: 1. Philological works; 2. Translations; 3. General accounts, travels, &c'. *The Chinese Repository,* Vol. 18, No. 8.

The Newly-Discovered *Daoguang* Edition of *Huaying Tongyu* and the Genealogy of Early Chinese English Primers

Tadaharu TANOMURA

Huaying Tongyu is the title given to a series of editions of English primers published in post-Opium War China. The author recently came across a copy of a hitherto unknown edition of *Huaying Tongyu,* dated the 29th year of *Daoguang* (1849 A.D.), in a stack room of the Osaka University Library. According to the author's analysis, it is most likely that it is the very first edition of *Huaying Tongyu*.

The principal aim of the present article is to clarify the genealogical relationship between several early Chinese English primers, including three editions of *Huaying Tongyu*. It will be demonstrated, among other things, that the *Daoguang* edition considerably draws upon Robert Thom's *Chinese-English Vocabulary*, Part First, published in 1843, and that all the subsequent editions of *Huaying Tongyu* were modeled after the *Daoguang* edition.

This article will also focus upon Fukuzawa Yukichi's annotated edition of *Huaying Tongyu,* which was published in Japan in 1860. In the annotated edition, Fukuzawa supplied each of the English words and sentences with a translation in Japanese and a phonetic transcription in the *kana* syllabary. The author will argue that Fukuzawa used the edition of *Huaying Tongyu* published in the 5th year of *Xianfeng* (1855 A.D.), a copy of which is in possession of the Tohoku University Library, and clarify what changes, apart from the above-mentioned two types of annotation, Fukuzawa made to the original Chinese edition.

In concluding sections, a few related issues involving the English primers treated here will be discussed.

Keywords: *Huaying Tongyu*, The *Daoguang* edition,『華英通語』, 道光本, 『増訂華英通語』